

《翻 訳》

エディンバラを出立、大西洋を渡り、ダリエンに到着
プレブル：〈ダリエンの大惨事(6)〉

渡 辺 邦 博：訳

1. はじめに
2. エディンバラから、大西洋を渡り、ダリエンに到着。ダリエンの大惨事
(6)
3. あとがき

1. はじめに

1698年7月14日にリースの港を出帆、一行は3通の指示書により、フォース湾内を経由して、北海を北にとり、マデイラ諸島を経由して、大西洋を西進する旅程であった。

ついに10月30日の翌日、一行は目的地ダリエンに到着した。プレブルの原著326ページには、第一次遠征隊を構成した5隻の船舶名とその命運が列挙されている。ハンブルグでインストレイション号として進水し、セイント・アンドルーと改名、ロバート・ペニクック船長の指揮の下航海を継続したが、ジャマイカのポート・ロイアルで放棄された、セイント・アンドルー号。

同じくハンブルグで進水、ロバート・ドラモンド船長の指揮下、1699年スコットランドに帰還したカレドニア号。アムステルダムで調達され、ギブスンによって、セイント・フランシス号から改名され、ロバー

ト・ピンカートン船長の指揮下航行するも、ニュー・イングランドで放擲されたユニコーン号。元はフランス船であったが、ギブスンによりアムステルダムで調達され、トマス・フラートン船長の指揮下に入ったが、カルタヘナでスペインに強奪されたドルフィン号。ニュー・カースルでジョン・マンロウが調達し、ジョン・マーロックを船長としたが、カリブ海で沈没することになったエンデヴァー号であった。

当時の諸外国との外交関係を考慮すると、あえて北海を北上して、スコットランド極北のペントランド海峡を掻い潜り、彼ら自身が後に、長期にわたる大西洋の航海よりも、「北上することの方がよほど苦しかった」と述懐したのも、想像に難くない。

彼らは、一方で船上での病死、他方で、ピンカートンたちとペニクックたちのような、指揮官たちの軋轢もあって、一行が一枚岩ではないことに悩まされながら、手探りのような歩みで大海を横切り、ようやくヴァージン諸島からはさらに3週間、南米大陸の北端、現在のコロンビア近傍に位置するダリエンに至ったのである。

2. エディンバラから、大西洋を經由して、ダリエンに到着。

ダリエンの大惨事 (6) ¹

交わす相手のない剣を携え、人々がミルンスクエア^{countryard}の中庭を一杯にした時、帰還兵たちがこの会社に改めて勢いを与えた。飢饉、極貧、失業と貧乏^{空の財布}に直面して、今やこの気高い事業^{Noble Undertaking}は、病的な熱病状態であるかに見える。その当時の人たちにとって、事業は希望であり、自由や繁栄を求め^{f e v e r e d}る熱病のような憧れを現したし、それがイングランドに対する彼らの反抗を象徴するものだった。ローデリック・マッケンジ²は、スコッ

1 本稿は、John Prebble, *The Darien Disaster*, Mainstream Publishing, Edinburgh, 1968. の翻訳であり、その pp.92-138 に相当する。

2 スコットランド会社の書記、イングランドに対する執拗な敵対者、後にグリーン船長の海賊行為のための拘束には責任があった。

トランド人の一致した希望である、日々の糧^{パン}、交易や繁栄を抹殺するというイングランドの決定が、どれほど冷酷なものなのかをスコットランド人たちに知らしめるであろう、ライカウト^{Rycaut, Paul}³によるハムブルグ議会への覚書^{memorial}の複写をひそかに出版して、この感情に自分自身のイングランドに対する憎悪を加えた。国王の年老いた大法官、マーチモント卿^{Chancellor}⁴は、この無礼に対して大層激怒して、ことによると、印刷業者を監禁し、トルブース⁵に若いマッケンジを派遣しかねない勢いであった。

スコットランドにおける国王の主だった役人たちは誰もが、彼らの主人に対する怒りの増大によって、不安となり、暴動や焼き討ちを思い起こすだけでなく、国王の引き立てが失われることを恐れていた。国王とその国の間では、大きな仕事に大きな人物を選出する潮時であった、つまりスコットランドの諸問題について、国王の秘書であり忠告者でもあった、太っちょで、笑顔をした長老派の聖職者、ウィリアム・カーステアーズ⁶として知られる人選を彼らは早急に行った。というのも、彼は、戦場であれ宮廷であれ、常にウィリアムの側^{そば}におり、彼宛の書簡は、国王の関心を煽ることに等しく、彼による比類のない同感は、買収された人物の仕業よりもはるかに有益であったから。

ホリールードの館からは、若きクィーンズベリ公爵⁷が、不安げに

3 ライカウト、ポール (Racout, Paul, 1629-1700)、外交官、東欧の経験から、アイランドを経て、名誉革命後ハムブルグで外交手腕を発揮、スコットランドの動向を妨害する役割を果たす。

4 マーチモント、Marchimont, (1641-1724) ,Sir Patrick Hume of Polwarth, 1st Earl of. 政治家にして契約派、スコットランド大法官。1690年ポウルワース (Polwarth) 卿に叙され、1679年マーチモント伯となる。スコットランド議会では国王の代弁者。会社には敵対者。

5 トルブース Tolbooth。もともと、仮小屋を意味する単語ブースと、税金とか手数料を表すトゥール toll から構成される単語か？ キャンونغイトに存在したからキャンونغイトのトルブースか？

6 ウィリアム・カーステアーズ (Carstares, William, 1649-1715) ストラスクライド・カースカート生まれ。プレスビテリアンの聖職者の息子。オランダでオランニュエ公ウィリアムに仕え、1683年には拘束もされたが、革命後エディンバラ大学学長となる。

カーステアーズに手紙を書いた。育ちがよく、黒髪のだグラスは、トウ
 イードデイルの明け渡した委員^{commissioner}の役職^{office}を得たが、何時もならそれに背
 をむけることで問題に対応するのを選ぶところが、今やそれに彼が関与
 するにしかずとみなした。この会社の評議員たちは、彼の言うには、国
 王がハンプルグの覚書を擁護することを目論んだ。「私は、それと、
 人々がイングランドから彼らに押し付けられていると考えるそれ以外の
 偏見について大袈裟に騒ぎ立てる人々を静かにさせるために、何がしか
 がなされるのを望む。」彼は、自分がその会社に深く関わり合ったこと
 を認めはしたが、もしも誰かしらが、幸運にも彼に対して、ありそうな
 事を国王に伝えることがあったとしても、彼がすることは、国王の意に
 かなうことを行うに過ぎなかったろう。^{The Lord Advocate} 検事総長のジェイムズ・ステ
 アート卿⁸は、〈p.93〉国王の信任を決して確信してはいない、物柔ら
 かな老人であったが、国王がその覚書を印刷する許可を与えたという流
 言によって、ひどく警戒心を持っていた。彼は、一言もなくそれを否定
 した。それは、印刷所の少年から始まった悪意のある嘘であった。そこ
 で、彼の同国人たちの憎しみを容認することによって自らの忠誠心を証
 明し、道徳家である以上に法律家であるものとして、彼は、何ら罪悪と
 は考えなかった。「私の救いは、誰もが私が無罪だと考えるところで、
 攻撃を受けることだ。と言うのも、私は、アフリカ会社とは何も取引は
 ないし、彼らの多くが私のことを味方がないとみなすだろうから。」そ

7 クィーンズベリ (Queensberry) は、ジェイムズ・ダグラス (James Douglas)。第2代公爵 (2nd Duke of)。1700年議会で国王代理。会社の敵対者、議会において会社の一団が国王に陳述するのをうまく防いだ。ツーカーパンチの反乱の間中熟睡中だった。P

8 このグッドツリーズ (Goodtrees) のステュアートは、後に1767年『経済の原理』を公刊することになったデナム (Denham) のステュアートの祖父であろう。曾祖父ステュアート (1608-81) がエディンバラ市長 (Lord Provost of Edinburgh) を務め、祖父ステュアート (1635-1713) が、検事総長 (Lord Advocate of Scotland) ないし司法長官を努めた。エディンバラ城に近い市内のロイヤルマイルに残る数多くの小路 (クロウス close) の一つには、その名を記したプレートが現存する。その息子のステュアート (1635-1713) が、「最初の経済学者」の父である。

の奉仕によって国務大臣として国王のための務めをはたしたジェイムズ・オグルヴィ卿⁹は、シーフィールド子爵位により程なく報われるであろうし、カーステアーズは、彼がその会社に資金を費やしておらず、その家族の誰にしても言うまでもなかったと、述べたのであった。彼の同僚の大臣はタリバーデン¹⁰と言う、あの革命の時期に自分の家族とジェイムズ王を見捨てた、感情を押し殺せる若者であったが、自分のジャコバイトの父親から剥奪された伯爵位を与えられた人物でもあって、自分が正しいことをやっているとの確信は決してなかった。彼は500ポンドをその会社に出資したが、彼がカーステアーズに説明したところによると、「国王のよしとしないと判明されるいかなる計画にでも妨害のためならこれまで以上の影響力を私は発揮する」と言う策略だったのであった。その会社が、ウィリアムへの陳述において、枢密院の援助を求めた時、オグルヴィとタリバーデンの両名はそれに反対の主張を行い、4票と言うギリギリの多数で評議会を切り抜けたのだった。

この会社は国王に対してその抗議を送付した。そのため、事態は実際の意味を失い、ウィリアムは、ハンブルグにおける彼の弁務官に、その都市の住民たちとの取り引きを妨害する際に、国王の名前やその権威を使用しないようにと、命じたと、(都合のよい時に)返書を出した。

理事たちは、秘密の装いを維持し、イングランドは彼らがどこに植民地を定めるのかを知らないとの所信によって、うわべを取り繕った。さらにイングランド政府は、それがダリエンに相違ないと十

9 第4代フィンドレイター Findlater 伯爵 (1664-1730) ジェイムズ・オグルヴィに対して、1701年にシーフィールド伯爵位が創設されたが、スコットランド国務大臣、国会議長ならびに国王代理として、国王のしもべを演ずる。会社の敵対者。後に群衆に屈服して、トマズグリーンの処刑を容認した。P

10 Tulibardine, John Murray, ジョン・マリ、伯爵。1696-98年にかけて、スコットランド国務大臣。ジャコバイトの同調者であるかの疑念を持たれたりするが、会社の支持者とその敵対者の間を行き来した。P

分承知しながら、そうでないかのように振る舞った。無作法とその反対の無関心とが喜劇的な莊重さをもってゆっくりと行き来した。Lords Justices of England イングランドの法務長官たちが、理事会の計画に関するオグルヴィの忠告を求めることを望んだが、ウィリアム・ブラスウェイト¹¹が、それに反対するよう彼らを説得した。その結果、ミルン・スクエアで巻き添えを喰らわないことを義理堅く表明しながら、この大臣は、その理由を知ることは一貫して前向きではなかった。「それは予期できたことだ」と、ブラスウェイトが皮肉まじりに漏らしたが、「彼はこの会社が意図するところについて何ら知識を持ち合わそうとはしなかったが、その知らせがここで注目され始めるようになると、彼らの遠征がいつそう進捗していることを、〈p.94〉彼らにそれとなく伝えようとしていた」。

ブラスウェイトの有するダリエンに関する情報は、ハンブルグのライコートヤオース¹²経由のものであったが、そのスパイ活動は、この会社が、会社の船舶をリースに運ぶように派遣した口の軽い船員たちから入手したものであった。「私は情報を得ました」とオースは報告した。「この川に現在停泊中のスコットランド東インド会社の2隻の船は、ダリエン地峡にあるアメリカの南岸行きを計画しておりました。」彼はずっとこのような船舶を監視しており、各々が、上部ならびに下部甲板に、56の砲門、112ポンド砲と8ポンド砲を搭載していたことを報告し、さらにその船舶には、上等のリンネル、スペイン・インド貿易に向けたレースやその他の品物が積み込まれるであろうと聞いていた。ハンブルグ商人たちは、パタースンとアースキンとが、ダリエンにおける植民地の意図を率直に語っていたことも、認めていた。「私の意見ですがそれ

11 Blathwayt, William (bap.1650-d.1717) イングランド政府関係者。ロンドン生まれ。オランダを皮切りに大陸諸国に通じており、名誉革命後特に枢密院に知故を得、ウィリアム2世に随伴して、新旧大陸で暗躍したが、1707年には失職。

12 Orth は不詳。

は」とオースが漏らしたのは、「疑念が差し挟まれる筋合いではなく、これこそが彼らの実際の計画です」と。

彼は、彼の想像力によれば、彼の書いたことを上回ると、盛んに書き送った。彼は、最近アイアランドに戻ったジョン・アヴェリ¹³の乗務員出身の海賊たちをスコットランド人たちが集めていると述べた。ある人が彼に言うには、つまりこの人物が言うことでもあるが、スコットランド人が、もしも彼らがそこに利益があると思えば、自ら海賊行為をいささかでも試みようともしている、と。したがって、ダブリンやコークの酒場からアヴェリの配下の一団がしょっ引かれ、投獄された上に尋問を受けたが、その何名かがのちに赦免となったのは、一旦彼らがその取り調べの目的が分かると、オースと言う人物の後ろ盾^{support}があると嘘をつく才覚があったからであった。

^{Lords Justice} 控訴院裁判官たちと ^{Commissioners of Trade} 交易委員たちは、スコットランド人たちによる植民を不可能、または少なくとも居住できないものにするのに講じられるはずの数々の方法に取り分け関心を持ったが、同時に全ては法の範囲内で、つまりイングランド法の範囲内でなされるべきことも切望していた。彼らはジェームズ・ヴァーノン氏¹⁴によって大いに助けられていた。その人物は、ペンリン¹⁵選出の初老の国会議員で、オクスフォードとケイムブリジの学者でもあり、オランダではかつて政府代理人を務め、

13 Henry Avery (bapt.1659, d.1696?) は、Captain John Averyとして知られる、海賊であった。プリマス近傍の Newton Ferrers で洗礼を受け、最初は英国海軍に入ったが、西インドでのスペイン船の引き上げを目論む武装船団に参加、その後インド洋を目指し海賊行為を繰り返した後、西インドに向かい、略奪を繰り返して帰国。デヴォンで貧窮の中死亡したが、その経験はしばしば、海賊ものの出版物や演劇作品を生んだ。DNB

14 Vernon, James (bapt.1646-, d. 1727) 軍人一族。イングランドの国務大臣。「ヴェーノン線」や、スコットランド植民地に援助や補給を与えるアメリカ農場を禁ずる宣言の考案者。会社の断固たる、かつ狡猾な敵対者。P

15 コーンウォールの地名、岬ないしは、先端、境界の意味、Mills,A.D. *A Dictionary of English Place-Names*,Oxford, 1991.

当時国務大臣省の助手であり、まもなく^{principal secretary} 首席大臣となるはずの人物だった。背が高く、日に焼けた顔に唇が下がった、細身の男で、服装はだらしなく、身のこなしは無愛想であったが、彼は、優秀であるにもかかわらず、^{patrons} 後援者の人選の点で特に恵まれなかったため、称号のない紳士として生涯を送ることになった、献身的な役人であった。ジョン・マッキーの言い方では、彼は役所であくせく働き、誰も書かないほど多くの書簡を^{したた}認めた。日が暮れて深夜にいたるまで机に向かって仕事をする彼の^{h a b i t}仕事ぶりには、〈p.95〉マッキーは、彼が何としても避けようとした、機嫌の悪い妻〈と顔を会わすこと〉とに原因があったと言う。

彼は、^{Lords of Justices} 控訴院裁判官たちと委員たちに、「^{Vernon's Line} ヴァーノン氏線」として知られるに至る^{ruling}裁定を申し渡した。それは、^{Attorney-General} 法務長官と^{Solicitor-General} 法務次官とに提示された4つの問題に基づいていた。両紳士は、スコットランド植民地はイングランド法に反するから、よって国王は、イングランド臣民たちがそれに援助、支援を与えることを禁ずると宣言した。イングランドないしはその植民地におけるあらゆる行政官や^{officers} 役人たちは、その植民地におもむくいかなる船舶でも探索し、彼らが海外で発見するいかなるイングランドの臣民たちでもそこから連れてくる権限を持つことになる。その植民地は国王陛下の同盟者とイングランドの交易に対する、疑いもなく敵対的であることとなる。^{Principal Secretary} ヴァーノンが数ヶ月後に筆頭大臣となるや、彼は、スコットランド会社の燦然と輝く旗をなびかせるいかなる船舶にも、一樽の真水たりとも供与してはならないと警告して、この^{minutes}覚書を、イングランド植民地すべての総督たち宛てに作成して送付した国王の布告を、法的に正当化したものとして利用した。

彼は同時に、カリブ海と^{M a i n}メイン川流域に関する情報を自分に提供できる者なら誰にでも辛抱強く耳を傾けた。かくして、ジャマイカのリチャード・ロング¹⁶船長が、彼の役所や^{Lords of Justices} 控訴院裁判員たちに重用されることになった。この頑丈な^{seaman}船乗りはクエイカー教徒と言われたが、疑い

もなく、面倒で道徳心に欠ける人物であった。と言うのも、彼は厳格な船長であると同時に口の悪い飲んだくれだったからである。彼は200ポンドと舟一隻が欲しいと、彼は御倅方たちに話をしたが、その結果その両方に対して、国王にはスペイン領アメリカの海難船から引き揚げられた金貨^{gold plate}で150万ポンドを献上する、と。彼の請願は物議を醸し、16点もの財宝に対する要求も考慮されたが、何ら行動は起こされなかった。しかし、誰も彼を忘れた訳ではなかった。

11月の終わりが近づき、ロンドンではオース氏経由で、スコットランド人たちの船団^{ships}がバルト海を出発したことが知らされた。その日、國務大臣トランブル^{Secretary Trumbull}¹⁷は、「1697年11月22日受領と判読される」彼の手紙に署名した。カレドニア号がフォース湾を出帆したのである。晴れた冬の光の中、船はバーンティスランド¹⁸で錨を揚げ、すべての帆を畳んだ。その船首から船尾は、金と赤と青で輝き、三角旗がメイントップ・マスト¹⁹やミズンマストから翻ると、その船の艦首砲が、湾の両側で歓声をあげる群衆に向かって、合図の礼砲を一発放った。それに対して、エディンバラ城の城壁からは、歓迎の白煙が一筋昇った。その船は、何びとかが国王ウィリアムご自身による許可を要請した記録はないのだが、〈p.96〉スコットランドの小規模な海軍の主力艦^{little}で、国王陛下のウィリアム号の船員たちによって、バルト海からすでに曳航されていたのであった。1週間後には、第2リユーバック船、つまり^{インストレーション}復興号^{a cable's length}が、バス・ロック²⁰を横目に、この湾に来航し、カレドニア号から1 鏈 離れ

16 不詳、Captain Richard ルーパート号のキューカー教徒船主。ジェイムズ・ヴェーノンによってスコットランド人の見張りのため派遣された。P

17 不詳

18 エディンバラの港湾リースから、フォース湾を挟んで北方にある海港。エディンバラは、北に傾斜した坂の上に存在するエディンバラ城を中心とした都市で、北に傾斜する坂を下ればフォース湾に至る。

19 以下、船の装備の、例えばメイントップ、ミズンなどについては、『ロビンソン・クルーソー』海保眞夫訳、岩波少年文庫、2004年刊、p.20 以下を参照した。

たところに投錨した時、合図の大砲を放った。日没前にその船はその紛らわしい名前^{equivocal}を返上し、理事たちは、ミルン・スクエアの鏡^{panellid}を備えた部屋で「今後はその船がセント・アンドルーと呼ばれるべきだ、というのとはそうした慣例の行事は翌日に行われるはずで、その日がセント・アンドルーの日だったのだから、」と決めて、互に祝杯をあげた。いずれも鎧張りで、350トン、3本マスト、前マストとメインマストに柱^{ステスル}を備え、ミズンマストに三角帆、さらに黄金の舳先には高い横帆のステスルを備えて、56門の大砲を装備した東インド会社の帆船であった。ユニオン号がアムステルダムからやってきた時には、その船には好ましくない意味合いがあると、同様に即座に拒否され、スコットランドの古代紋章にある4足獣に敬意を表して、ユニコーン号の方がよいとされた。現在では銀色の一角獣がウィリアム王の両腕の片方で支えられているが、〈当時〉子供たちなら誰でも、反対に、イングランドの獅子に対して、勇敢に、厳しく抵抗をする状態を知っていた。

その年の終わりまでにさらに2隻の船舶も到着したが、いずれも他の船舶のための補給船で、どちらも沿岸航行船に過ぎなかった。ドルフィン号は2本マストの、獅子鼻のスノー型帆船で、ジェイムズ・ギブスン²¹がオランダでのフランス捕虜たちから購入したフランスの分捕り品であった。荒れた海では、船が波間に頑強に船首を突っ込み、船首から船体までが海水に食らいついた。その仲間がエンデヴァー号で、多忙なマンロウ氏²²がニューカースルで買い付けた小型船^{ビンク}だったが、それは、少なくとも1名のイングランド人船主はその政府の意向に拘らなかったことを示している。その船は、船尾が高く、大きな舵と喫水線から狭い甲

20 ノース・ベリック North Berwick 北東 4.5 キロ、フォース湾に浮かぶ島、ジャコバイトの団が一時占領して 1694 年まで抵抗したこともある。現在は野鳥の保護区。木村俊夫他『スコットランド文化事典』2006 年、参照。

21 ライジングサン号の所有者、第二次植民地の票議員。会社の取締役でアムステルダム代理人。カロライナ沿岸で自分の船とともに遭難。P

板まで膨らんだような丸い船体をしていたが、航海には適していて、帆桁yard armsを海で濡らす時には吐き気をもよおすような調子で揺れるので、操舵するのが桁外れに難しかった。

この会社には自前の船団fleetがあった。「立ち昇る太陽」号ライジング・サンも、到着する予定だったが、トップマストや巻き上げ装置がなく、アムステルダムで氷の中に足止め状態だった。そこでは、偉大なるピーター^{the Great}²³が、ディレックスン²⁴やギブスンとともにその船底でワインを嗜んでいた。だが、その船もまたやってくる手筈になっていた。その船が必ず来航するとの約束が、ファイフの白い崖に麗しく描かれた5隻の素晴らしい船舶の中に、既に存在したのだった。

〈p.97〉潮流と天候が許すなら、冬いっぱい、フォース湾を横切り、リースからバーンティスランドへと、渡し船が行き交い、倉庫を空にして、船倉を満杯にした。今やEquipping Ships 艦装委員会ができて、この委員会の商人構成員であったジェイムズ・マックルーフ²⁵の姪たちの所有するコーヒーハウスでは、ウィリアム・アーバックルの下で、会合が持たれた。そこに詰め込まれたのは、リースの醸造業者トマス・ホワイト産のビールの大樽^{hogsheads}²⁶、パン屋ニニアン²⁷・ヘイの手になるパン、デイヴィッド・モントゴメリ製造の陶製パイプ、イーフライム・ロバーツの製造した染料であった。ある日、空っぽの水樽に詰められて、380冊の聖書、51冊の新約聖書、200冊の信仰告白、2,808冊の教理問答が積み込まれたが、それらはすべてアンダースン未亡人が印刷し、すべて移住者たち

22 Munro of Coul, Dr. John, コウルのマンロウ博士、遠征隊の薬品、両色を整えるため会社に雇われる。第二次遠征隊の出奔を拒否。使い込みで告発される。P

23 ピーターとは、誰なのか？ イエスの教えに従った筆頭がペテロ、すなわちピーターだが、訳者は、ここまでの経緯から、ウィリアム・バタースンのことを指すと解釈する。

24 不詳

25 不詳

26 英国では 52 1/2 ガロン、一石余りの液量。

を励まし、英語が教えられるとの仮定の上、インディアンたちに神意を伝えるとの意図によっていた。エディンバラの3名の帽子製造人たちが、彼らの約定の第一番目として、(一つ2シリングで) 1440の帽子を配ったが、ジェレミイ・ロバートスンが、彼の巻き毛カツラ、カツラ、キャンペーンカツラ^{his bob-wigs periwigs}数箱を送った。ウォルター・ヘリス^{campain wigs}²⁸なら、彼のユーモアは大体においてサバを読むきらいがあったが、嘲るような洞察力で、以上のような数字のことがとても滑稽だと考えただろう。

大量の、スコットランド風帽子；英語の聖書、1500冊；あるものは長く、あるものは短い、巻き毛カツラ 4000；^{旅行用のカツラ}キャンペーン、スペイン風の髪の毛、自然な髪の毛。おまけに、ハイランダーたちの毛でできていたので、それらはすべて天然で、雨と太陽で漂白されていたが、西インドでほぐされた時には、ペリシテ人たちの中に送り届けたサムソン²⁹の数多くの焼き討ち船のようになってしまっ、人々が家屋の壁に塗り込んだ時に、石灰と混ぜ合わされなかったに

27 聖ニニアン (Saint Ninian) はキリスト教の聖人である。スコットランドのピクト人との間の初期の宣教師として8世紀に初めて言及された。このために、彼は南方ピクト人への使徒 (Apostle to the Southern Picts) として知られており、ロウランド (低地) 地方を通じたピクト人の遺産を持つスコットランド各地、および、ノーサンブリアの遺産を持つイングランド北部の一部におびただしい数の彼への献呈 (dedication) がある。ニニアンは、スコットランドではリンガン (Ringan) としても知られ、イングランド北部では トリニアン (Trynnian) としても知られる。

28 既に登場した人物のうち、ジェイムズ・スミスと並んで、仔細がよく分からない存在であるが、プレブルの人物リストによると、イングランドの海軍医も経験し、ダリエン 第一次遠征に同行したが、それを放棄してロンドンに戻り、書物を通じて植民地批判を行った。プレブルは、イングランドからの買収に応じたのだと記している。

29 サムソン、イスラエルの怪力の士師。『旧約聖書』士師記、13章から16章。神に仕えるナジルびと。一定期間神に使えて生きる誓いをたてた人たち。サムソンはぶどう酒を断ち頭髪を剃らずに生やす。吠え猛る獅子でも素手で引き裂く怪力の持ち主。その使命はペリシテびとに奪われたガザの奪回を課題とする。デリラに怪力の秘密を奪われ無力な人に戻り、両眼をくり抜かれ神殿の柱に縛り付けられる。頭髪が伸び怪力を回復して、ペリシテのダゴン神殿を柱もろとも押し倒し、屋上の男女 3000 人を道連れに絶命した。

しても、植民地にとっては何の役にも立ち得なかった。*

*マコーレーは後に、ヘリスを信頼できる権威者として受け入れ、熱帯に交易品としてカツラを持ち込んだ人々があったのを冷やかして、それらが入植者たちに使われる意図があったのを忘れて、同じ様に嘲笑的であった。しかし、サルトーンのアレクサンダーは、ヘリスに答えて、彼らの交易の価値を正当化しようと試みた。「衣類、毛織物、靴、靴下、室内上靴、それからカツラなどの積荷は、原住民たちが衣類の不足のため裸で生活する国では、適当であり、イングランド、オランダ、フランスないしはスペインの植民地などでは、他の商品類と交換するのに適しているに相違ない。」

5隻すべてに積載された財貨の総価値は、1万8413ポンド 5シリング 2分の1ペンスであった。カレドニア号とセント・アンドルー号は、いずれも最大多数の入植者たちを搬送する予定だったから、最も大きな荷物を運んだ。斧、ナイフ、ツルハシ、^{マットック}そしてハンマーなど、桶屋、大工、金属細工人たちの道具類、〈p.98〉都会の扉、窓などを繋ぎとめる、オイル箱に入れた充分な釘類があった。^{Fuses}信管、^{grenades}手投げ弾、^{キャノン}大砲とその^{cannon-shell}弾丸とその火薬やマスケット銃、拳銃とダンピラ、^{水兵用の銃}カッタラスと^{pikes}槍、さらに千丁の良質の黒革製の^{cartridge pouches}弾薬袋。これらが使用される時の、和平交渉なり、凱旋用の^{brass}真鍮製トランペットやドラムもあった。男性用の靴下や女性用のストッキング、25000足を上回る靴、パンプス、スリッパがあった。「梱包なし状態の衣類」として、^布ティッキング、帆布、リネン、サージ、モスリン、光沢のあるキャリコ、タータンの^{格子織}ブラッド、粗ラシャ、そして^{留め具}ハーンなどの梱や束などがあった。国旗や信号旗用の色で染めたクレープ、ネクタイ用の縞のあるモスリン、船員用のオランダアヒル。1万4000本の縫針、黒、灰色、白の麻糸、撚り糸の玉。鉄製のフライパンやポット、イングランド風白目のたらいや水差し、千にも及ぶ

ガラス製高級水飲みカップ、角製のスプーンや木製の皿。モントゴメリー氏の最良の白の陶器の中には、29樽分のタバコパイプ。印刷用具として、君主たちとの条約にと羊皮紙、インクと羽ペン、^{sealing-wax} 封ろうと^{watered silk} 波紋織の赤いリボン。鉄砲用の^{F l i n t s} 火打ち石と^{tinder-boxes} 火口箱、数え切れないろうそく、3000本のろうそく立て。木製、^{b r a s s} 真鍮製、角製と^{p e w t e r} 白金製のボタン。姿見と二千ポンドの純白の石鹸。

次に櫛。長い髪の毛をその指で梳る、ターナのインディアンたちをライオネル・ウェイファが描いた牧歌的な絵画を思い起こしながら、理事たちは、何万もの、大小を問わない、焚きつけ木、柘植の木、角から作成されたものを注文した後に、積み込んだ。真珠層からできたビーズをはめ込んだ木製の櫛のような小間物などによって、^{imperial foothold} 帝国の足場が賸えたのだった。

粒の粗い、中ほどの、それに良質の、何百トンものビスケット、70トンの^{s t a l l e d} 肥やした牛肉、20トンのスモモ、15トンの豚肉、何樽もの獣脂、小麦粉と製粉してない小麦。1200ガロンの強いクラレット、1700〈ガロン〉のラム酒、五千ガロンの食用酢、さらに五千ガロン以上のブランデー。すべては念入りに試食された。週に一度^{Committee for Equipping} 装備委員会が船の船長たちと共にリースに降り、そこで難癖をつけ、「草を喰ませたのと肥らせた牛肉との双方と、同時に豚肉やその他の食糧の良し悪しや状態を特に味見して、普通でない場合には同様なことをして、自分たち用に熟成させ、上記の船長の大満足に叶うようにした。」

その上、次のような人たちもいたのだ。1698年3月12日、一枚のフォリオシートが〈p.99〉ミルン・スクエアの入り口と、エディンバラ、リース、グラーズゴウのコーヒーハウスのすべての壁、に張り出された。

スコットランドのインド、アフリカ会社の理事会は、目下のとこ

ろ、船舶を整え非常に良好な状態にあり、食糧とともにインド諸島の植民地に入植するために計画された遠征に必要な食糧とあらゆる種類の文物を整えたが、以下の如く通知する。上記の遠征にすすんで出立することすべてをあまねく奨励するために：

第一次遠征に出掛けるすべての人たちは、植樹可能な50エーカーの土地を、少なくとも主たる都市または街に少なくとも50フィート四方の土地と、3年の後には、植民地によってそこに建設される通常の建築物を、受け取り、所有することを定める。

すべての評議員は、^{Councillor}2倍を所有できる。死亡した者がある場合、その収益はその妻と直近の姻戚に引き継がれる。その家族と血縁者たちは、会社の負担で移送される権利を有する。

その政府は、総会の命により、特段の報酬を必ず与えられる。

秘書 ローデリック・マッケンジ

その布告は、最近^{the Lord Lyon King of Arms}スコットランド紋章院長官によって認証された会社の意匠が凝らされていた。つまりセント・アンドルーの青地に白の〈スコットランド〉十字、満帆の船で区切り、全体は、荷を積載したペルーの2頭のラマ、そして見上げるような象、全てがインディアンとあふれるばかりの果実を盛ったヤギの角製品を持つアフリカの黒人たちによって支えられている。その一番上には、懐疑を見通す表現である首を傾げた人間の顔の上に、立ち上る太陽があった。

この植民地の政治並びに社会構造は、すでに決定済みだった。終局的には議会の計画もあったが、当面のところ、それぞれの構成員が週毎に交代で統括者を務める、1名の評議員による統治が行われるはずだった。（そして、その驚くべき不適切な連想の提案者は、当人の記憶と

いう特権のため、確かではない)。評議会の下には、それに完全に従属するものとして、植民者たちの多数が、監督者たち、^{O v e r s e e r s} 補佐あるいは^{A s s i s t a n t} 助監督たち、^{S u b - O v e r s e e r s} そして入植者に別れていた。彼らはすべて兵士であって、第一の者は、^{f i e l d - o f f i c e r s} 佐官と^{c a p t a i n s} 指揮官、第二は下級将校、^{s u b a l t e r n s} 第三はその高貴な名前のヒビキにもかかわらず、1日3ペンスで徴募され、40名からなる一団で集結させられた、^{p r i v a t e} 内輪の番兵で^{s e n t i n e l s} あった。〈p.100〉不正は、あまりなく、誰もが自ら名乗り出たし、彼らの軍隊の階級によって呼ばれたが、この会社の法令は、国王の枢密院の許可なくそのような兵士の雇用を禁じていたので、一人としてそれ〈階級〉を要求したものはなかった。

聖職者たち、^{s u r g e o n s} 外科医たち、^{p h y s i c i a n s} 内科医たち、それに^{a p o t h e c a r i e s} 薬剤師たち、事務員たちや職人たち、さらに軍人の階級が仕事上の境界線を区切ったけれども、この遠征は同時に^{h o r i z o n t a l l y} 見習い水夫たちと^{v e r t i c a l l y} 船乗りたちを上下に分断した。時が経つに連れ、こうした区別が差別的になる運命にあった。

志願者の不足はまったくなく、マッケンジの布告を待つ者もなかった。若くて除隊させられた士官たちは、冒険を望み、その背後にはフランダースやハイランドに率いられ、士官に対して^{生 活}パンと仕事という唯一つの希望を思い描く多数の飢えた男たちがいた。エディンバラは、赤い上着や、緑や青のもみ革製の縁取りで燃え上がった。^{c o b b l e s} 丸石道路の上では剣が揺らぎ、居酒屋では血気盛んな叫び声が上がった。ナミュール以前のよく指導されたわびしい希望なら、叔父の昇任くらいには考えられただろうし、うまく治療した負傷なら、傷跡に勇気の証が充てがわれたかも知れない。ジェイムズ・オグルヴィは、今ではシーフィールド卿だが、エディンバラにいて、彼ならこの会社に仕事を確保できたと考える人たちに悩まされていた。「私の玄関口には多数の負傷した将校たちがいる」と彼はカーステアーズに愚痴をこぼした。「それでも私は彼らにどう言っているのか分からない。」すべての理事たちは、この大尉やあの^{e n s i g n} 歩兵少尉、この息子やあの^{d r u m m e r} 姪、立派な軍曹や勇敢な鼓手なりを求める

請願が行われるのに苦しめられていた。どんな家族であっても、アフリカ会社に勤務したいとする熱い意志のある若者がなければ、えこひいきに苦情を漏らすはずもなかった。

最後には、12000人が受け入れられ、このうち3000人が、^{Gentlemen}紳士の志願者か入植者たちと同じ階級と任務を持ったが、彼らよりも社会的には上位の、良家の相続人とか長男以外の息子たちであった。植民者たちの3分の1以上が、ハイランド出身者たち、アーガイル、ストラスネイヴァー、ヒルズ、またはマッケイ出身の除隊兵士たちで、彼らの士官たちに従うなり、その連隊に引き受けられたのと同じ一族への忠誠心という^{ツテ}伝に依る者たちであった。彼らの多くは、ゲール語以外を話すことができなかった。

選考される60名は慎重に選ばれ、12名の大佐たち、24名の中尉たち、24名の歩兵少尉たちがいた。理事たちの前では威信が持たれたが、彼らのすべてが〈p.101〉その後、「彼らが期待を寄せる励みにかなり自由に話をするだけでなく、当然のことながらそれを通じて彼らの意向について報告するのに応じるための」ある特殊な委員会によって伝えられることになっていた。この奨励は、例えば、どの船長にもその会社の株式で150ポンドとか、海軍中尉一人には100ポンドとか、旗手一人には5ポンドとかは、家族の資産を取り戻すとか、^{fortune}独力でそれを形成することを望む若者にとっては重要なことであった。彼らの多くは、^{L a c h l a n}ラックラン、マクレイン、ウィリアム・フレイザ、ジョン・キャンブルとコリン・キャンブル、ヒュー・マンロウ大尉、パトリック・マクダウエル、コリン・キャンブル、アrikザンダ・マッケンジ少尉、ダンカン・キャンブルとウィリアム・キャンブルたちであった。彼らのうちの8名は、最近アーガイルの士官たちであったキャンブル族出身で、彼らの連隊の誉、彼らの首長であった伯爵の影響下にあり、あの革命に際しての一族の忠誠が彼らの選考を保証したのだった。

ジョン・マンロウ博士は、この遠征のための外科医、内科医を募り、ミルン・スクエアで志願者たちを接見した後、ちょっとした試験を通じて彼らを、解剖、船医、あるいは薬学の実務^{practice}に配置した。彼は、すでに選考されていた2名の医師たち、ヘクター・マッケンジ、ウォルター・ヘリスの助けを受けた。グレンイーグルのホールデン³⁰が、1696年11月にロンドンに赴いた時、自らジェイムズ・スミスと称した詐欺師を暴露し、ヘリスというもう一人にも騙されたとした。彼はこの口の上手いダンバートの男にモンクリフ³¹のコーヒー・ハウスで出会ったが、その男がこの会社の仕事に採用されて、オランダに赴くということを強く説得された。彼は、一人の不運な同郷人をイングランドの絞首繩の先端での理不尽な最後から救い出すという人助け^{service}をしているとの考えだった。

これに先立つ年まで、ヘリスはイングランド海軍で船医をしており、ソールトンのフレッチャーの言うところによると、カトリクに鞍替えとなり、国王の士官たちに客を取り持ってその地位を確保したのだった。彼は、玉座にあるカトリク教徒が一人のプロテスタントによってすぐ替えられた数ヶ月の後、如才なくこの信仰を放棄したが、売春業者^{pander}として繁昌を継続していた。彼は短気で、自らが心に描いた名声に対しては油断がなく、痛烈で直感力の鋭い才覚の持ち主であった。海軍船医としての彼の経歴は、ある実際の、または想像上の無礼に際して、彼が剣を抜き放ち、自らの艇長であった、ビーチヘッド³²とバルフル³³の英雄、ヴァンガードのジョン・グレイドン船長³⁴を一突きにした、ポーツ

30 既出。会社の取締役。カーノクのアースキンや、バタースンと共にハンブルグに派遣された。ジェイムズ・スミスの財産横領を発見した。P

31 モンクリフはパースに起源を持つ一族。

32 プライトンの東、白亜の断崖の先端、「麗しき岬」beau chefとも称される。イングランドでは政治理論家として知られる (Sumeray.D. & J. Sheppard, *London Plaques*, Shire Publications, 2010) 人物の散骨地に近い。当人の遺言により、ドーバー海峡に面する風光明媚なイーストボーン沖合いに散骨されたと言われる。日付は8月27日、ドーバーは荒天であった、と。

マスのある日に終焉を迎えた。グレイドンはその傷から回復し、ヘリスが参謀会議Council of Warの前に剣から、ヤードアーム〈p.102〉桁端に逃がそうとしたが、スコットランドの士官はこの船医を救出できる力がなかった。グレイドンによってヤクザもの無法者との烙印を押されたけれども、彼は今なおロンドンに潜んでおり、彼がホールデンに引き合わされた時には、他のスコットランド人たちに守られていたのだった。その後の18ヶ月というもの、オランダでもスコットランドにいても、彼は糧食と医薬品の監督者としてこの会社のために働き、それからマンロウ氏の全幅の信頼と敬意を得たのだった。彼〈グレイドン〉は、後にこの医者が、この会社の費用で自分の財布を（おそらく不正ではなく）一杯にしたことを責めて、いずれに對しても恩を返した。「ギャロウエから来た浮浪者を救え」と、アンドルー・フレッチャーは古い諺を引いて、「そうすりゃ、そいつが一番にあんたの首を斬る」と、言った。

2月になると、ロバートとトマス・ドラモンドの二人の兄弟が、一方は船乗り、もう一人は兵隊と、この会社への尽力を申し出た。残酷な上に、我利我利亡者、弱い者には高飛車、片意地な暴漢で、自らの掟には忠実だが、他人に対する同情がないことは別として扱い易すかったが、彼らは、その会社が責任ある業務を与えた者に対しては堂々とした態度で臨む数少ない人間たちの中にいたので、彼らは、その最終的かつ芝居がかった悲劇に際しては、その中心になる者たちとなることになっ

33 英語名バーフラー、1692年フランス北西部、イギリス海峡に突き出すコタンタン半島先端に位置する港湾都市シェルブール近傍のバルフルール岬沖でイングランドとの大規模な海戦（バルフルール岬の海戦）が行われた。フランスはジェイムズ2世を支持し、フランス・アイアランド軍を集結させ、イングランド・オランダ連合艦隊と戦闘、双方に大損傷を受け、フランス艦隊は分散し、イングランド侵攻計画が雲散に終わった。

34 Greydon, John (d.1726) イングランド海軍士官。1689年5月1日、Bantry 湾の作戦に参加、その後1690年6月30日にピーチャーヘッド沖の海戦を指揮、1692年にはバルフルール沖の海戦で「ハンプトン・コート」を指揮。1695年から97年にかけては、「ヴァンガード」を指揮した海軍の英雄。

た。彼らは、マルコム・ベッグ、レノックスのセインの家系だと主張しており、ポーランドとか、コンクレイグ、ストラスアーンlairdsの地主たちまでたどれるドラモンド家の落ちぶれた分家sonsの後裔motherたちだったが、出所を通じてなら、かの有力なハミルトン家との血統blood tiesを持っていた。ロバートは、彼がミルン・スクエアに姿を現した時には海軍大尉を除隊したところで、船舶の指揮権を図々しく要求し、ドルフィン号と共に月に5ポンド10シリング・スターリングを手にするのに十分な一族の影響力があつた。艦shipと給料とは、自分がそう値すると思えたよりも大きくはなかったが、彼の主張したのは、その考えが、後にカレドニア号と5シリング以上を与えられることに、充分な説得力あつたということだった。彼は信頼のおける船乗りにして、断固たる船長だった。

トマス・ドラモンドは、何ら推薦を必要とはしなかった。彼の名前はスコットランド中に知られていたから。アーガイル伯の連隊の中でも精鋭部隊captainの兵士の統率者として、彼は低地地方で勇しい従軍の経験があり、ドテニーDottignies³⁵におけるフランスの要塞を攻撃した折、ラムゼイのスコットランド旅団の先頭に立って自らの中隊を統率した。しかし、彼が有名となったのは、その中隊のほとんどを失った、この血まみれの完敗によってではなかった。彼とその精鋭部隊は、グレンライアのロバート・キャンブル指揮下で、あの虐殺の朝グレンコウにもいたのだった。ドラモンドにとってその義務は〈p.103〉巢穴のネズミの根絶やし以外の何者でもないかに見えた。吐き気を催したキャンブルが、捕縛されたマクドナルド一族の最後の9名の殺戮に戸惑いを見せた時、ドラモンドは、彼を押し退け、「何故奴がまだ生きているのだ。われわれの命令を何とこころえる。ヤツを殺せ！」と叫んだ。彼は自らその若者にピストルを放ち、その後グレンライアの足下でゆるしを乞う12歳の少年を銃

35 ブルッヘ＝ブリュッセル西方、フランス国境に近いベルギーの都市。

殺にした。1695年の委員会による調査の後、スコットランド議会は審理と処罰のためフランダースからの彼の召喚を要求したが、彼はその連隊とともにフランスの捕虜となっていた。R y s w i c k の講和の2年後に彼が帰国した時、国王は、グレンコウのことは何も耳にしたくないというあからさまな態度だった。

もしもこの^{court of Directors}理事会が、この乱暴で、冷酷な男の暗い過去を議論したとしても、彼らにはその疑惑を明るみににはできなかった。彼らは彼に^{Overseer}監督という権限を与えた。彼は、グレンコウの問題に関係して理事会が起用した、ただ一人の兵士ではなかった。ヒルやアーガイル連隊出身の^{private}平の歩哨たちもいたし、少なくともあの^{Hill}ヒル出身の2名の士官たち、彼らが一隊を与えたチャールズ・フォーブズと、さらに、彼らが^{Councillor}評議員にするはずのイーケットのジェイムズ・カニンガム³⁶少佐^{Major}がいたのだった。このような人々、さらにあの殺戮には関係のなかった他の人々は、ダリエンをめぐる悲痛な争いの渦中にドラモンドの一小部隊団を編成したが、それに対して彼らの敵対者たちは彼らを「グレンコウ一味」と呼んだのだった。

かくして、植民者たちは、大小の^{appointments}取り決めに従って契約された。ヒュー・ロウズ氏³⁷は彼の後援者だった^{Lord President}高等民事裁判所の裁判長による熱狂的な推薦に基づいて、この植民地の^{Clerk}事務官になるはずだった。この上もなく成功した商人だったアリグザンダ・ハミルトン³⁸は、^{Accountant}主計官としての^{service offered}職務を申し出たが、貨物と商品の管理官となった時、それ以上に成功した。尊師アダム・スコット³⁹氏は、長老派のご加護により、会社

36 カニンガム、ジェイムズ少佐。自ら放棄した第一次遠征隊の評議員。P

37 ロウズ、ヒュー。第一次遠征隊の事務官や事務員。公開と上陸に関する日誌を作成した。P

38 不詳

39 不詳

から100ポンドの株式と必須の書物の購入のため10ポンドを拝領する聖職者として赴くことに嬉々として首を縦に振った。尊師トマス・ジェイムズ⁴⁰氏にも与えられる同等の申し入れが期待されたが、不運なことに、聞き届けられなかった。彼はパターソンの熱烈な賞賛者だったが、彼の友人が理不尽にも拒否された時、この会社に奉職できなかった。ロジャ・オズワルド⁴¹は、^{G e n t i e m e n}ジェントルマン志願者として処遇されることを喧しく言いたてた、熱心で、夢想的な若者たちの一人だった。彼の父親の、シングルトンのジェイムズ・オズワルド卿は、ラナークシャの^{地 主}レアドで、彼に関する噂によると、いわれのない過失のため最近投獄されることになった出納局長の役人だったが、〈p.104〉この植民地でのこの息子の行為に、この家族の国民的な名誉は依存するのだと疑うことなく、自らの息子を委ねた、厳格で情け容赦のない親であった。ゲール語で一書記官による批評を意味する名前を持つマカイ族のハイランドマン、ジョン・エイズン⁴²は、彼が「いく種類かの数学的処理、特に要塞、航海術、などに関する格段の精通者」だと主張した後、志願者に起用されることにもなった。ただ、理論だけですが、と彼は付言したが。マッケンジの仕事場の一人用椅子に座っていたジェイムズ・リンジ⁴³は、ダンビラやピストル、粗ラシャやタータンに、どっぶりつかり、赤い上着とターポーリンのジャケットを身に付けた幸運な男たちと付き合いのに飽き飽きしていた。彼は、世間の評価では、紳士には程遠かったが、事務官として出発するのを申し出、認められた。ウィリアム・シンプスン⁴⁴と言う、エディンバラの印刷屋が、ユニコーン号に積み込まれて

40 不詳

41 志願者として第一次植民地に従事。生き残ったが、父親から勘当される。彼の書簡は、ダリエンでの生活の生き生きとした説明が含まれている。P

42 不詳

43 不詳

44 不詳

いた印刷機を動かすことを請け合い、一月40シリングで契約され、そのうち10シリングが在宅の彼の妻に支払われるはずとなった。

さらにベンジャミン・スペンス⁴⁵なるユダヤ人が、翻訳者として採用された。彼の言うには、6つの言語を読み、書き、話すことができる、そしてスペイン語とポルトガル語がとりわけ流暢だったので、資格としては、この会社以上に彼が貢献することになった。というのも、彼は、15ヶ月間スペイン人の囚人となる運命にあったのだから。

バーティスランド⁴⁶で乗船を待つ下甲板船員の中では、この会社や植民地にはほとんど熱意がなかった。あの戦争の終結以来、こうした港は仕事がなく飢えた船乗りたちで溢れており、どんな働^{b e r t h}き口でも何もないよりましだった。船舶装^{The Committee for Equipping Ships}備の委員会は、オランダやドイツからこの会社の船団を運んだ船乗りたちには支払いを済ませ、埠頭の怠^{compassion}け者たち出身の別の者たちからは取り立てた。これは、立派な営業感覚であって同情ではない。平和の結果として賃銀が下がったが、それは今では供給が需要を超過したからで、まったく、第一級の船^{c r e w s}乗りなら戦争時の相場を受け取っていたのだから。船乗りたちは、数週間はこのひどい契^{b a r g a i n}約を黙って受け入れていたが、その後彼らは反抗したのだった。カレドニア号の船内の反抗の首謀者たち、ボウリとかマックアリグザンダたちは、4月のはじめにこの委員会に連行された。彼らは、「不満の様子を顕にして自分たちの船長に対して騒然たる態度に出た」と告発された。つまり職場放棄、すなわち、彼らと共に任務放棄しようとする者たちを潰すための脅しをであった。この委員会は、言い抜けに対しては好機を逃さなかった。〈p.105〉マスケット銃兵たちの縦列の中から、2人の男たちが、トゥルブースに送られて、そこで委員会の意向で、倉庫管理

45 通訳者として第一次遠征隊と共に船出。キューバでスペイン人に捕虜とされ、スペインに送られ、ピンカートンと共に獄中にあった。P

46 エディンバラからフォース湾を挟んだ北方の対岸、ファイフにある王室領。

人のウィリアム・ターンブル⁴⁷と共に留め置かれたが、当人はこの会社の在庫品を着服して彼の個人的なやっかい事に決着をつけていた。

おそらくは、カレドニア号船上でのこの混乱の結果として、さらに海上での暴動は港でのそれより確実に悪いだろうと解釈して、この理事たちは、乗組員たちの船上での状態を改善することに決めた。彼らは報酬〈賃銀〉をあげることも糧食を改善することもしなかったが、5人の船員すべてに、彼らのわずかな財産の積み込みに対して戸棚一つが妥当だと命じた。仮にこれが船上の若い紳士^{gentlemen}たちから嫉みがましい憤慨を受けなかったとしても、それは、どの志願者にも、一樽分の収納場所が船倉にあてがわれるという解決となった。その中に、彼〈志願者〉が植民地に持参したいと願う個人的身の回り品や交易品を保存できたのである。

この会社は、あろうことか、再びジェイムズ・スミスに関わる問題を抱えることになった。それは、結局のところ、「彼に委ねられた信頼を卑劣にも破ったために」、そして考えられるには遅すぎると思われる状態で、理事会名簿から彼の名前が発見されることになった。彼は、すでにロンドンに1年間滞在していたのに、資産を現金化して、その金銭を返済するには耐えられないほど動きが鈍かった。マンロウ博士が、彼をそうさせるべく南へ派遣された。スミスは、マンロウの叱責に数日間耐え、それから妻や、その家族、親戚筋と自分の荷物を馬車に放り込み、ドーバーからフランスに向けて出発した。マンロウは、巡査たちのみならず特注の逮捕状を携えて馬で彼を追いかけて、水際で彼を捕まえ、ロンドンの監獄に連れ戻した。この理事たちは、この惨めな男の訴追に充てるべく400ポンドをマンロウに送った。

彼らは、ロンドンでライオネル・ウェイファを捜し出せとの指令を彼〈マンロウ〉に送り、この会社との仕事^{employment}の問題について彼に打診さ

47 不詳

せた。それは、この若き海賊^{buccaneer}を起用する第二度目の試みであった。数週間前彼は、ポンタックス^{P o n t a c k s}で食事をして、アンドルー・フレッチャーと、セント・アンドルー号の船長兼この会社の艦隊の提督であったロバート・ペニクック^{P e n n e c u i k}⁴⁸との提案を議論していた。彼らは、彼が説得には余地^{o p e n}があると報告して、理事たちにさらに彼と交渉するように進言した。フレッチャーは、この会社に何の職務もなく、一貫して第三者的で好意的な信念を持って行動し、この船医を理事たちが雇用することを望むと素直に信じてはいたが、彼らの意図は実際のところもっと狡猾で、ウェイファが、彼らのすべての事業をまさに危険にさらそうとするのではないかというほとんど理性を失った恐れに動かされていた。

〈p.106〉一年前、ウェイファとダンピアは、^{the Commissioners of Trade}交易委員会によりロンドンで細部にわたる取り調べを受け、スコットランド人なり、その他誰にせよ、ダリエンの植民地に定住するとか占拠することができるかどうかの質問を受けた。彼らは、250名の優れた戦闘員に、インディア人たちの助けがあれば、スペイン人が海路、陸路で召集できるものがどんなものであっても足場を確保し、維持するのは可能だと述べた。500人もあれば領土を安定させ、それを維持できる、と。彼らの念頭にはおそらく海賊たちがあり、役立たずのフランダースの古参兵たちやイングランドやスコットランドの諸州出身の青二才の少年たちではなかっただろうが、彼らの確信は印象深いものであった。委員たちは、^{L o r d s J u s t i c e s}最高刑事裁判官たちに、^{Golden Island}ダリエン沿岸沖の黄金島を占有するために船を1隻派遣すべきだと勧告した。しかしながら、この提案からは何も生まれなかった。

さて、理事たちは、ウェイファが彼の話のある印刷業者の手に差し出し

48 セント・アンドルー号の司令官、会社の船団の指揮官、第一次植民地の評議員の一人。イングランドの海軍士官だったこともあった。誰と言わず、とりわけドラモンド一族とは犬猿の仲。植民地放棄の後、水死。P

たのを耳にして、一旦それが公刊されて、それどころか、待ち望む楽園^{waiting}パライダイスについての風説^{account}が広く知られることになれば、イングランド人がベンボー提督⁴⁹の西インド艦隊に対して、理事たちの船団がフォース湾を離れる前に、ダリエンの領有を宣言するような命令を出すかも知れないと考えた。

マンロウは、6月早々にこの会社のロンドン代理人ジェイムズ・キャンブル⁵⁰と共にウェイファの滞在所^{lodgings}を訪れた。彼らは、この若者がおよそ無邪気な船乗り^{ingenuous tarpaulin}などではなく、彼が抜け目のない交渉人で、フィッツジェラルドと呼ばれたアイアランド商人から十分な助言を受けているのが分かった。彼がその書物をひと月延期することで20ギニーを提供された時、彼は、1000ポンドなら会社が望むあらゆる情報をこの会社に渡してもよいと述べた。マンロウは、バタースンが理事たちに与えた彼の草稿の複写の形で、理事たちがすでにその大部分を手中にしていたとは彼に告げなかった。彼の対抗措置は知れたものだった。彼らは押し問答を繰り返したが、契約の諸条件に合意を見て、キャンブルによって体裁が整えられ、フィッツジェラルドによって書き上げられた。ウェイファは、一ヶ月出版を保留し、エディンバラの理事たちや総会^{Council-General}とのさらなる議論のため直ちに出發することになった。彼はこの旅程とロンドンでの彼の所用の片付け費用に50ポンドを受け取り、さらに、もしも彼がこの会社の仕事に2年間加わるなら、彼はこの書物をまったく棚上げにして、700ポンドを受け取るようになっていた。もしもエディンバラで何

49 Benbow, John (1653-1703) イングランド艦隊の提督、1680年代後半、ウィリアム3世時代には大同盟戦争 (War of the Grand Alliance) に従軍、90年のビーチャーヘッド海戦に参加、98年には西インドに派遣され、ダリエン計画に起因するスペイン・スコットランド両植民地間の紛争の調停にあたった。帰国後、02年サンタ・マルタの沖でフランス艦隊と交戦。麾下の7隻中4隻の艦長が攻撃命令に従わず、残りの兵力で戦うも、敵艦隊を取り逃し、自らも重傷を負ってジャマイカに引き揚げた後死亡。軍律に違反した艦長たちはその後、軍法会議により、2名が銃殺となった。L.R. スティーヴンスンの『宝島』は、エディンバラの「ベンボー提督」なる居酒屋から物語が開始される。

50 キャンブル、ジェイムズ。商人、ロンドンでの会社の代理人。P

ら合意に至らなければ、彼は一ヶ月後に出発して、公刊してもよいという話だった。ウエイファは署名して、その週のうちにスコットランドに向けた早馬に乗った。

〈p.107〉その後この事態は滑稽な茶番劇となった。彼は、マンロウが内密がすべてだと主張するので、『ブラウン氏』として旅をした。イングランド人なら彼とダリエンに関するスコットランド人たちの関心を知っていたのだから、誰も秘密ではあり得ないと思っていただろうと訝しげだったが、ウエイファはこころよくこれに同意した。彼は国境を越え、ハデイントン⁵¹経由でエディンバラに向かって馬を進めた。そこにあった駅舎で、後に自ら書いた覚え書の中で述べたのだが、彼は Pennecuik^{Pennecuik}に引き合わされた。

.....その人物が私に言うことには、彼は、ある内密の理由のため、私がエディンバラで目撃されたり、ウワサになるのは具合がよくないので、街道から1マイルほど離れた家に私の宿を定める必要があった、と私に知らせるために、この会社の内密の委員会から急きよ派遣されたと。

その家とはソールトン・ホール、つまりアンドルー・フレッチャーの館で、あの偉大なる愛国者が彼を歓迎すべく待機していた。次の日には、一台の馬車が、5人の会社のお偉方、パンミュア伯と新参^{n e w}のトゥードデイル侯爵、お二人とも評議員^{councillors}で、さらにホールデン、ブラックウッド⁵²とフランシス・スコット⁵³卿という3名の理事たちだった。彼らが彼に尋ねたのは、もしも彼がこの問題をそのように決

51 エディンバラ東方15マイルほどの土地。

52 ブラックウッド、ロバート。商人。会社の共同設立者。バルフォアと共に運動に関わる。ロンドンの取締役。P

53 不詳

めたのなら、彼がロンドンに戻る必要はないとのことだったが、彼は
a day's notice
 しかるべき日に海外に行けると言われていると告げた。これはよい知ら
 せだ、と彼らは述べた。というのも、彼らの艦隊は8日から10日もすれば
 出帆の手筈が整うはずだったので。彼らは辞去して、次の日にペニクッ
 クとともに戻ってきた。

この日の会合、次の第2にないし第3の会合も同様だったが、そ
conference
 の目的はダリエンという地域countryのことを彼らに知らせることでした。
 そのことを私は、そのように偉大な榮譽ある方々から私に対してい
 ささかでも私の意図が疑われることなく、例えば私はともかく、
 ヨーロッパの誰にも知られてなかったNicaraguaニカラグアの樹木からなる財
 宝だけでなく、あのダリエンという地域に関する秘密のすべてを私
 以外には内緒で打ち明けることもないように、私は誠実に果たした
 のだが、彼らはとりわけ、この財宝について、その生育していると
 ころ、海に近いとすれば、何処で容易く海外に船荷で積み出せるの
 かと、取り立ててどこまでも言って聞かなかった。私は、彼らが尋
 ねた、問題の各方面について大いに満足させたのだった。

あの素晴らしいアカスギred-woodについてはあまりにも多くが、この遠征に関
 する彼の義務についてはあまりに少なく話題となったのに対して、港湾
 や推定調査、および水先案内pilotageについてペニクックが書き留めたことは
 夥しいものにのぼった。その後理事たちがダリエンについて問いただし
 た時、ウェイファなら自分の手稿のことでとは訝しげに思い起こしたの
 ではと思われる言葉や言い回しを使って彼らは語った。彼にしてみれば
 子供扱いだと考えたし、〈p.108〉どんな場合であっても、彼の困惑に
 とっては単なる意味のないお喋りに過ぎない機会に、幼稚な扱いで片付
 けられたようであった。しかし、この会社はまだ彼を用済みにしたので

はなかった。ウォルター・ヘリスは、こうなると闇に^{by night}紛れて彼を迎えに行くだけでなく、密かにエディンバラに戻すために使いにも赴かされた。そこで彼はハイストリートの外れで秘密裏に宿を与えられ、外出しないように申し渡されていたのだった。「彼らのいうところでは、万が一私がスコットランドにいることが知られるようなことがあれば、必ずや起こるに相違ないことだが、彼らの計画が万が一にも、イングランドで知れ渡ることなきように」。このタバコの^{s m o k e - g r a i n e d}染み付いた高い建物の中で、彼はベニクックとヘリス以外の誰にも会わなかったし、そして、ついにある日に^{Equipping Ships}船舶装備委員会からの視察を受けるまで、この建物の油にまみれた窓から見えるもの以外に何ら気を紛らわせるものがなかった。イングランドがダリエンに対するこの会社の計画の事を知るとなれば、その植民地の所在地は、別の場所のおもわくのために退けられただろうと告げられた。彼に^{the River Plate}ラ・プラタ川についてなにがしかの知識があったかどうか。彼は知らなかった。アマゾンについては？とんでもない。かわいそうなことに、彼はあまり失望する必要もなかった。この会社は彼の苦痛に何某かの恩典を考えたかも知れなかった。その午後、ベニクック船長は、彼には20ギニーと、イングランドへの無事帰還に対する理事たちの心付けをもたらした。

ウェイファをエディンバラから、^{post-road}郵便経路までどうにか連れ出したウォルター・ヘリスは、事の次第一切に対して、とりわけ夜行便と、静かな階段の最上階にあるさみしい部屋という歓待を受けた。彼は、この訪問が今なお秘密を維持されるべきだとの理事たちの最後の警告は必要でないと考えた。というのも、この不機嫌な若者がそれについて語りしても必ず物笑いの対象とされただろうから。「彼が手にしたエディンバラに関する知識はほんのわずかだったから、もしも彼がその都市に戻るようなことがあっても、この会社がニカラグアの樹林への道を発見できないのと同じくらい、彼が滞在した場所への道筋を見つけることは

不可能だった」。

一つの点で理事たちはウェイファに誠実であった。彼らの船団は出帆の用意ができていた。彼の書物の第一ページを印刷業者が活字に組む前に、船団は海上にあるはずだったから。

「世評への熱望によって励まされた、勇気ある、多数の団」

エディンバラ、1698年7月

河口には立派な船舶がいたが、広大な丘や広々とした海域に比べると、帆船は生き残りという一国の深刻な希望を積み込むにしては、お話にならないほど小さくみえた。〈p.108〉くる日も来る日も鮮やかに輝いた太陽は、この会社が自ら選んだ社章にとっては残酷な嘲笑であった。艦隊に積み込まれた何トンもの食糧^{m e a l}、何樽もの牛肉とは対照的に、復興はほとんど見込めない干からびた畑や空っぽの牛舎があった。「大きな困難と落胆とには」とマーチモント卿はカーステアーズに書き送った。「地面を覆う作物の作付けが悪いことに原因があります。干ばつ^{d r o u t h}が長引き、穀物がとても不足して育ちが良くないように見えます。……実のところ、この国は、根深い困窮の状態にあって、すべての人たちがそれを強く感じています。」収穫があるべき状態になるのが確実に遅れ、夏の花が実を結ぶ前に、雪が地表高く積もる可能性がある国では、これは危険なことであった。これまでに知られた最悪の凶作の年には、スコットランドはこの艦隊に食糧を供給する貯蔵庫を失ない、必要な時にこの植民地に供給するものが何も残らず、次の年にはもっと厳しい飢饉が確実に手も足も出ない状態だった。

この会社は、それに対する、またはそれに備える重い義務を承知して

いた。「ところが、にもかかわらず」それは新たに指名を受けた植民地の評議員たちにとっても明かだった。「この会社は、彼らの計画した植民地の立ち上げに対して、彼らの全ストックの最も重要な部分を調べ、支出し、投じたが、それからの費用は、何があろうとも、時節がくれば、この植民地からこの会社へと、それに対して支払いのない期間を価値あるものと酌量の上、払い戻されるはずであった」。かくして、この植民地の目的とは、利益^{もうけ}であると素っ気なく語った7名の人物たちが、特別の委員会によって選出され、その年の初めに、評議員として最も必要とされた人間の典型と決定されることが始まった。結局のところ、論争好きで、抜^{j e a l o u s}け目ない一団の考えで、選出されたが、どのような資質を委員会が特段に評価したのかは分かり難い。

イーケット^{E i c k e t t}のジェイムズ・カニングム少佐は、この理事たちによって認められた最初の人物だったが、おそらくは任務を放棄した最初の人でもあっただろう。彼はフォート・ウィリアムのヒル連隊で軍務に就き、一隊の指揮官としてあの虐殺の朝、大隊を率いてグレンコウに行軍し、その後それについてのヒルの報告をエディンバラに伝えた。彼は傲慢で、自己中心的で、なおかつ横柄であったが、最初の評議員^{Councilor}としての彼の考えは、彼の秘書官^{secretary}として自分の兄弟ウィリアムの任用を確保することであった。彼は生涯を通じてただの一度もスコットランドを出たこともなければ、戦場^{field}で戦闘の経験もないし、船舶や交易のことも一切知らなかった。ウォルター・ヘリスの言うには、彼が「そのスコットランド教会の柱」だということだったが、これが〈p.110〉彼の地位^{appointment}を物語っている、つまり、今に至るまでこの会社は、長老派の是認なり祈祷者なしにはほとんど何もしてなかったのであった。

54 Mackay, Daniel, 法律家。評議員として第一次遠征隊の航海に携わる。後に緊急文書を携えて帰国。スピーディリタン号で第二次遠征隊に随行。ジャマイカとカレドニアの間で、船から落ちて行方知れず。P

ダニエル・マックイ⁵⁴は、同じ日に選出されたが、レイ卿^{Reay}の生国出身で、実直な若きハイランド人、彼が活動する限り、熱心に関心を持つ賢明な堅物^{hard man to like}であった。ヘリスによると、彼は「公証人^{scrivener}または事務弁護士^{writer's clerk}の助手で、その見習期間を終えたばかり」だったので、理事たちはいま少し経験を考えたかも知れなかったが、彼は事実上既に現役の法律家であった。3番目の評議員ジェイムズ・モントゴメリ⁵⁶は、ヒル〈連隊〉を除隊したもう一人の士官であった。彼はスコツガード^{近衛連隊}における歩兵少尉^{ensign}であったが、「その職務を由とせず、それを離れ、別の連隊で茶色のマスケツ銃を帯びた」とヘリスは述べた。彼は勇敢な兵士で、仮に彼がこの植民地政府に対していかなる智力による、あるいは政略上の貢献をし得なかったとしても、戦場でスペイン人たちに対して、彼の体得した最善の方法で、これに貢献した。そうであっても、彼の地位^{appointment}は、彼の祖父がエグリントン伯爵で、彼の父親が少将^{Major General}であり、彼の叔父が枢密院顧問官兼財務長官^{Privy Councillor Lord of Treasury}であった事実によってのみ説明が可能である。

ウィリアム・ヴェッチ⁵⁷、第4回目に指名されたが、何度かの代理の後のみこの職務^{officer}を引き受けたが、今なお体調不良で、自分の病床から起き上がれるかどうか定かでなかった。ヘリスは、彼がおおよそ商人^{man of trade}ではないとした「が、敬虔な聖職者にして神の栄光を讃える人物でもあった、彼の父親^{on account of}のおかげでこの地位に昇進した」と述べた。この父親は、確かにスコットランドの聖人支配の伝説に残る一員で、監督制^{Episcopacy}に異

56 Montgomerie, James. 大尉、エグリントン伯爵の親族。第一次植民地の評議会メンバー。スペインとの小競り合いに勝利。ペニクックとは不仲となり、ジョリと共にダリエンを離れる。会社から譴責される。P

57 サミュエル・ヴェッチの父親。 サミュエル・ヴェッチは、(1688-1732) ウィリアムの息子。ウトレヒトで教育を受ける。オランダ軍に任官した。1688年オランダ公ウイリアムに随行してイングランドへ。1689年ダンケルドでキャメロン派の連隊の士官 (officer)。低地地方で戦闘。ダリエン遠征に参加、ニューヨーク、アルバニーに植民。

を唱えて騎馬大隊を率い、エディンバラでは契約派のためにスパイとなり、迫害や追放によってmore and most少なからず苦汁を飲んだ、ラナークシャの説教師であった。Privy Council枢密院は、彼にin absentia欠席のまま死罪を宣告したが、革命後only sinceに限り、彼と家族とは私人としての平穏と安全が認められた。彼は、二人の息子が聖職者として彼に従い、ことの決着までウトレヒトで教育を与えるのを望んだが、ウィリアム3世の即位によって、そうではなくて兩名とも兵士となった。ウィリアムがスコットランド騎兵連隊⁵⁸に入隊させたので、サミュエルはキャメロン派のlieutenant陸軍中尉となり、彼らがダンケルドの燃え上がる通りからかの一族を撃退した時、彼らの最初の血塗れの戦闘にも参加させることになった。二人の若者は、後にフランダースに従軍したが、それが、今なお兄を病床に止めることになったシュタインカーク⁵⁹において被った、癒えることなき負傷となった。彼らは不屈のveterans老練兵で、〈p.111〉彼らの称するところの「全幅の同志」、トマス・ドラモンドの忠実な友であった。父親の憐憫の情や私心のないところをほとんど受け継がなかったサミュエル・ヴェッチ*は、今や、若き志願兵ロジャ・オズワルドを含む「mixed lot混成の一団」を指揮する、指揮者であった。

*父親はその名前を、Veitch と綴った。私〈著者であるプレブル、訳者注〉は、

二人の兄弟とこの会社によって使用されたこの綴りを採用した。⁶⁰

残る3名の選出された評議員は、seamen船乗りであった。ただし、ロバー

58 ロイアル・スコッツ・グレイズ：1681年編成。以下のような様々な呼称がある。王立スコットランド騎兵連隊、王立ブリテン北方騎兵連隊など。

59 ステークケルの戦い（Battle of Steenkerque）は、大同盟戦争における戦闘の1つで、1692年8月3日に現在のベルギー・ワロン地域エノー州の都市ステークケルでイングランド・オランダ同盟軍とフランス軍が衝突した。

60 サミュエル（1688 - 1732）は、ウトレヒトで教育を受け、オランダで陸軍に任官、1688年オランニエ公に1688年随伴、1689年ダンケルドでキャメロン派の連隊の士官、低地地域で戦闘、ダリエン遠征に参加、ニューヨーク、アルバニーに定住。ドラモンドの友人で、ペニクックに対抗した一団の一人。

ト・ジョリ⁶¹は、ハンブルグで商人となるため海を離れており、10数年以上船の指揮をしたことがなかった。その都市とシェットランド諸島間の交易独占（確定的な純利益とともに、各航海に際して30から40%を彼は確信していたが）を持つスコットランド会社という彼の提案は、それが書かれた文書を超えるほど重要ではなかったが、そうした制限のない利潤の見通しやハンブルグにおけるこの会社の委員会に彼が供与した助成は、おそらく選考委員会に印象を与えたであろう。お決まりの語呂合わせをくどくど使って、ヘリスは、彼が「太ったスコットランドの大きくなりすぎたハンバーガー」だと述べたが、本当のところ彼は、エルペ川沿いに家屋を維持できたならもっと幸福だったかも知れない哀れで無力な男だったと。

第二の船乗り評議員であったロバート・ピンカートン⁶²には、別のいきざつがあった。そして、ヘリスでも、不承不承ながらこの人物を評価しており、この人物を「申し分のない、素直な、苦難を凌いだ船乗りで、水夫長であったことを除けば、どのような地位や国家の役人としても、これまで決して知られたことがなかった」とその特徴を述べている。甲板長であろうとなかろうと、彼は、その部下たちによって評価され、見習い水兵たちによって尊敬された、辛抱強く、不平を漏らさない、最良の船員であった。彼はその指揮に誇りを持ち、ユニコーン号では、彼の簡素で、孤独なキャビンに、折りたたみの食卓とリネンのテーブル掛け、クッションと銅製のロウソク立て、卓上コショウひきと姿見を備えていた。まるで彼が軍艦を指揮するかのように、彼は自らの船員に洗練された制服を着用させ、全員が銀のユニコーンを刺繍したヴェル

61 船長、商人。第一次植民地の評議員。ベニクックと不仲になり逮捕される。植民地を離れたが、後年会社によって、その仕事と特権を剥奪された。P

62 Pincarton, Robert. 船長。セント・アンドルー号の司令官で、第一次評議会の一員であった。ドルフィン号に乗船中、彼はスペイン人に捕らえられ、19カ月獄中にあった。P

ヴェットの帽子を被っていた。自らを評議員として証明するには彼に時間が少な過ぎたし、この植民地はそのためには最悪の状態であった。

最後に、*セント・アンドルー号*の指揮者で、この艦隊の提督であった、ロバート・ペニクック船長であったが、この評議員の中では、この職務を正当化する英智と経験を有するただ一人の人物だと自己評価していた。彼は片意地だけでなく、傲慢で、他の水兵たち以外のすべてに、さらに彼の判断に異議を申し立てる者たちに疑いを持っていた。〈p.112〉彼はスコットランドを21年間も不在にしており、彼の海上での指揮の特徴は、イングランド海軍における、軍医、海軍大尉、砲撃重臼砲bomb-ketchの船長として、彼が従軍した戦役を通じてのことであった。彼は評議員に任命を受けたが、ヘリスの述べたところでは、*Kirk party* 教会派の利害によって、教会のバランスをとり、確実に両者を墮落させたとの評判を有する無神論者、M---博士を隠蔽keep outする次善の策であった」。この無名のドクターとは、疑いもなくマンロウのことで、目的達成を阻まれた子供のように不機嫌で、膨れっ面をしていたが、彼がのちに植民地に放擲を命じられた時に、拒絶の猶予を見出したのだった。ペニクックが任務を承諾した条件とは、ほとんど独断的だったが、議論の余地なく理事たちによって認められたように見える。彼が主張したのは、彼を超える権威を持つ人たちは、例え彼がその不名誉を被る運命にあったとしても、少なくとも海上で行動を目撃してきた人間でなくてはならない、と。彼はかく要求し、その結果認められた。つまり、彼の5人の部下のそれぞれに対して1日15シリングとプラス割当額、すなわち、海上にいない時には半分を、仕事ができない時には終生半額を。彼はさらに、「イングランドの東インド会社におけるいかなる指揮官とも同等の多くの特権」を要求し、それを受け取った。

以上が、スコットランドの崇高な事業noble undertakingを取り仕切るために選ばれた奇妙、かつ不釣り合いな人々であった。ロバート・ピンカートン、そして

おそらくヴェッチのような例外はあるものの、彼らの誰をとっても、賢明で無欲な施政を約束するような資質はなかった。その国が、ダニエル・マックイ以上に経験豊富な法律家なり、カニンガム以上の高貴な精神の持ち主であったり、モントゴメリにまさる熟達した兵士とか、ジョリー以上のそつのない商人とか、ロバート・ペニクックに劣らぬ人間味あふれる指揮官を見つけることができなかつたと考えるのも不可能である。もしも彼らがくじ引きで選ばれたとしても、その国における最良の代表者以上の存在だっただろうが、利害と抜擢が彼らを指名したのであって、その方法は、それが時代の習慣であったのだから、洞察によって判断されうるものではない。スコットランドは、いつでも、小役人や委員たちによって、その時代の悲劇的な役割を上回^{share}ることをしてきたのだった。彼らは選考され、7月の初めには、彼らの6名が宣誓したが、ウィリアム・ヴェッチは、まだ「医者^{share}の世話にかかる」状態であると書き送ったのだった。彼らはリースで、それも艦隊を目前にして宣誓を行なった。

われわれは、全能の神を前で、恭しく、〈p.113〉われわれが、かの会社によってわれわれに安泰を与えられた現実に対して、忠実かつ正当であるべきことを、われわれが神に返答するべきこと同様に、われわれの知識と力量の及ぶ限り、その会社の利益とその会社の利害を促進すべきことを約束しかつ宣誓します。

6月早々から、人員と船舶とは、準備の整った5隻の大型船、1200人の人員、そして一年分の食糧と言う形で準備は整っていた。その月の8日日には、最初の80名の水兵^{landsmen}たちが、カレドニア号、ユニコーン号、セント・アンドルー号に乗船させられた。

次の数週間中に、退屈でくだらないお喋りはあったが、意気揚々とした人員はほとんどなく、他方で、接岸中のその船尾甲板を海上での灼熱で悪臭のする中甲板とすげ替えるような、緊急の航行の兆候も全然なかった。その月の終わりに、理事たちは、彼らがすぐさま乗船するのを条件に、「この都市で徴用されたものには誰に対してでも」、14.5ペンス、「国内から連れて来られた人なら一人について半ドル」を約束して、まだその一団に集結せずに、ぐずぐずしている士官^{officers}たちに拍車をかけた。ローデリック・マッケンジは、6月29日の水曜日にコーヒー・ハウスの声明文を発行したが、それは、「次の週の月曜日12時までに出帆を割りあてられた数隻の船に乗船してこの航海に向かうように定められている全ての乗務員とその他の者を任命する」との内容であった。その結果、エディンバラとリースの通りは、一隊を呼び込む太鼓、小太鼓、パラディドル^{paraddiddle}と集会の長引くどよめきとで沸きかえった。フェリーは人々を湾を越えて運び、3隻の大きな船の中で、彼らはさらに2週間待つことになった。

だが、ほとんどのことが未完の状態であった。ぐずぐずする人たちに約束された支払いをめぐる苦情や口論もあったが、そのことに対して今では理事たちが実行を渋っているように見えた。何時にないことだったが、潮が低くて、積み込みが困難となった。セント・アンドルー号に積み込んだ水に塩が含まれているのが発見され、ユニコーン号とカレドニア号からの大型ボート^{long-boats}が、真水の大樽を運搬するため呼びにやられた。2本マストの小型船^pとスノー型帆船^sのための船長がなお指名を待っていたが、ペニクックが、自分自身の好みを出してみんなを混乱させた。マリオン・スマイス^{Smyth}の頼みの綱で、一人息子だったキャビンボーイ^{ship's boy}が溺死してしまったために、浄財を求めた請願のような、些細なこともあった。彼女は20シリングを贈呈された。トゥールブースにあった彼らの惨めな独居房からは、ボウリー⁶³とマック・アリゲザンダ⁶⁴とター

ンプル⁶⁵とが、^{released} 放免の暁にはこの遠征に同行すると約束して、^{mercy} 赦免を嘆願した。彼らは監視の元で乗船に送致となった。ウィリアム・ヴェッチは、〈p.114〉「もしも彼の力がいざという場合にお役に立つなら」と、なおも同行する意思はあったが、その時点では宣誓してなかった。

^{The Court of Directors} 理事會はミルン・スクエアとリースにおいてそれでも毎日召集された。^{Council-General} 総会ですら、滅多に会合はなく、通常は定足数も満たさなかったが、なんとか召集され、植民地の政府を定め、その評議員会に対する指令を発することになった。それらは7月8日に公刊されたが、もしも植民地の^{s i t e} 所在がまだ定まらないとなれば、それは結局の^{a t l a s t} ところ名称を与えられただけであった。

^{presents} 本証書によって各人は、本王国の^{the Great Seal} 国璽書の下にある国王陛下による^{Letters Patent} 特許状によるのと同様に、本国会の第4会期の第32番法令と現今の国会第5会期の第8号法令とにより、アフリカとインド諸島で交易をおこなうスコットランド会社に付与される権限並びに特権の遂行においては、件の会社の^{Council-General} 評議員会が、慎重なる熟慮に基づいて、アメリカで住民のいないか、その住民たちの合意があり、なおかつヨーロッパの^{Sovereign} 主権者、または^{Prince} 君主ないし^{State} 国家によって所有されてないところの、どこか別の場所に、植民地を定め、入植させ、カレドニアの名称で呼ばれるべきことを、決定した。

63 Bowrie、不詳

64 MacAlexander、不詳

65 Turnbull、第一次遠征隊の会社役員。ニューヨークからのトマス・ドラモンドと共にカレドニアに帰還。ツブカガンティでフォウナブと共に闘う。ペドロ船長の友人。P

軍事上、民間用を問わず、政府のあらゆる権力は、この植民地^{plantation}に上陸した後、定住した後6名を越えない構成員数を増加させる権限を有する、植民地の評議員たちに依存する。彼らはその土地を少なくとも50の地域と、せいぜい60名の自由民^{free men}に分割することができ、「彼らは、彼らがこの植民地の議会またはその評議会において彼らを代表するのに当然相応しいと考えられる、誰であれ自由な住民を毎年選出しなければならない」ものとする。この議会^{parliament}は、この評議員会^{the Council}の判断によって、召集または休会させられるべきだが、法令や基本法のような、あらゆる法律を作成・制定し、この植民地の福祉に必要と思われる租税を付加することができる。いかなる国の自由人であっても、この植民地との交易が可能であり、その人物がそれを自国で生産して、スコットランドとの間で同等の権利や特権を享受できる。さらに、上記の素晴らしい宣言にある条件としての用語^{word}は、「自由人^{Freeman}」であった。そのことは直接には言及されていないが、この植民地が、その他の全てと同様に、究極的には奴隷の労働の利用なしには繁栄できないことが、この会社とその支持者たちによって明らかに理解されていたのであった。

〈p.115〉この植民地からのすべての輸出は、この会社に貨幣または現物で支払うことが可能な、2パーセントの税^{levy}を免れることができない。この会社は、また、それ自身に、あらゆる土地の1/20、あらゆる黄金、銀、珠玉^{jewels}、宝玉^{gems}または宝石、真珠、漂着物^{wrecks}、や希少な樹木に対して1/20を予定しており、それから毎年一桶分のタバコ（これはおそらくはこの会社がその後国王に委ねる）と引き換えに、それ以外の19分の1が植民地に帰属することになっていた。1702年1月1日からは、ヨーロッパ、アジア、さらにアフリカからこの植民地に輸入されたか、さらにこの植民地かスコットランドの船舶に存在するあらゆる財貨は、2%の税^{levy}を免れないことになるだろう。

表立ってのことではないが、評議員たちは、その立ち入った説明を受けた。彼らは、その秘密の搬送命令の中に名前を記された土地に向かう艦隊に対して指令をすることになっていた。そこで彼らは建設を行い、入植を行い、守備を行い、この植民地にとって最善の利害を念頭に、人員と船舶を使役するはずであった。彼らはこの会社の榮譽をないがしろにせず、その国旗に対する無礼を跳ね除け、軍事力によって両者〈評議員たちと植民地〉を防衛することになっていた。彼らの義務は、航海と上陸についての正確な日誌を作成し、そこを離れる最初の船舶によってこれを母国に送ることであった。彼らはまた、然るべき報告を継続して、公正な貿易を主張し、さらにその土地が正当に分割されたことを請け合わなければならなかった。何びとに対しても50エイカーという最初の、平等主義的な約束があるということは、驚くべきことではないが、変更された。士官たちは今や100を、評議員たちは150を受け取った。こんなにも多くを手に入れば、彼らはそれ以上何も受け取らないように、そうでないと、それ以外の人々には何も与えられなくなるから、との警告がなされた、つまり「究極的には、徴収することが耕作するよりもよいことになると、他の勤勉な人たちを意気消沈させることになる、少数による独占の状態にはならないか？」と。

評議員たちは7月12日火曜日にリースで、彼らの指令を承認するという署名を行なった。その午前中に、バーンティスランドから船が続々とやってきて、フォース湾の南岸沖に停泊した。スプリットと中檣からたなびく白い聖アンドルー旗と旭日旗の間に、提督の三角旗が、セント・アンドルー号の船首倉の方面に駆け上がり、副提督がピンカートンのユニコーン号に対して厳しい命令をかけた。それは、陰気な陽がさし、白いキャンバスと赤い銃眼には鮮やかで、船尾と船首には黄金の裝飾が新たに配置された日のことだった。小さな補給船には今や船長たちもおり、ドルフィン号にはトマス・フラートン⁶⁶、エンデヴァー号には

ジョン・マロック⁶⁷、兩名ともに、ベニクックがイングランド海軍で知り合いとなり、今では彼に抜擢されて上記のような指令を受けていた。
 〈p.116〉 リースの海岸には大勢の群衆が、黄昏が夜に変わるまで船舶を眺めて、歓迎の意を表したが、船尾灯のオレンジの輝き以外には何も見えず、造船所で軋む音や時を告げる夜警の心細い声以外には何も聞こえなかった。^{Ballad-writers}バラード作家たちは、各船の名前が中途半端なことや、カレドニア・トライアンフファンズ⁶⁸の書き手⁶⁸がうまくそれを利用したことを面白がるのに吝かではなかった。

セイント・アンドルー、その人がわれらの最初の守護者だった、
 ユニコーンは、その次の補佐役に相違ない、
 カレドニアは、しんがりを育てる
 勇猛で勇敢な男と共に戦えば、おそれを知らない；
 素晴らしい出来上がりのすべてが、3つも揃って
 エンデヴァーとドルフィンが、控えている。

理事たち全員がリースに揃い、所狭しとひしめきあう所で、彼らにできる限り最終の仕事を取り行なった。3年の間、些細な事柄であれ悲劇であれスコットランドの公文書館を一杯にするほどのインクや紙切れによる膨大な支出が続いた。その結果多忙な書き手の中で今や最も疲れを知らないのはベニクック船長であった。彼は毎日のように乗船して、その部下にもっと多くのペン、さらに多くのインク、より多くの紙を求めて上陸させたのだった。3マイル離れたところで、シーフィールド卿も、カーステアズに対して書簡を書き、この騒ぎで大いに疲れたことを

66 不詳

67 不詳

68 不詳

認め、活気のない眼付きでこの遠征に思いを巡らせていた。「私は認める、そしてここにおられる多くの人々もそうではなからうか。すなわち、期待されるほどそれはうまくは行かないかも知れないが、それにもかかわらず、自分自身の国がよく評価されるのを願う人で、この会社の利益となることなら何であれ確信を持って異を唱える者は誰一人ないだろう」。この逆説は、それ自身自己撞着を含んでいたのだ。なぜなら、この国は事実上熱中状態になって、この遠征が失敗する訳がないと確信していたのだから。エディンバラは、訪れる者たちで溢れかえり、リースの酒場やパブでは、倅や、兄弟、亭主などに別れを告げ、彼らの幸先のよい船団に別れの時間を費やすためにやって来た善男善女でごったがえしていた。この植民地は失敗するはずがない、そのような高貴な若者たちが仕事をするのだから。カレドニア・トライアンフアンズの人びとは、雲散霧消した臆病者たち、イングランドの中傷者たちに対して、大声で訴えた。

これらの若者たちは、この私たちの国の泡沫^{scum}などではない、だが、実際のところ、勇敢で寛大な集団というものは、栄誉という渴きで鼓舞されれば、彼らの墓石の上で、近いうちには、称号を手にすることになるだろう。

〈p.117〉1200人の中には、相当数の男子と、多少の女子がいる。彼らの墓場の多くは、確実に年内に、陸上と海上にできるだろうが、大理石の墓標はないだろう。もっと幸福な者に対しては、木造を製作する者もいるだろうが、それはすぐさまアリの餌食になるだろう。

船隊は7月14日、木曜日の早朝に出帆したが、秘密の行き先という作り話はなお継続していた。それがグリエンに相違ないということを知らない者はほとんどなかったが、ペニクックとその船長たちが封印された

orders
指令書を切り開くまで、承認されることはなかった。油を染み込ませ
sailcloth
セールクロスに包まれた3つの小さな束、一つはこの艦隊がこの湾を
通過した時に結びを解かれ、第二のものは第一のものに指示された時間
と場所で解読され、第三のものは「^{settlement}植民地の所定の場所で」開封される
ことになっていた。

Castle Hill
カースルヒル⁶⁹とカールトン・クレイグ⁷⁰の上には群衆が集まり、こ
の都市の南の崖にある窓という窓には、汚れなき顔で腕を振る者たちが
見えた。リースでは、男も女も、叫び、呼びかけ、歌いながら水際へと
押しかけた。なかには、お祈をするためひざまづく者もあったり、聖職
者たちによる靈感を受けた声で戒めを与えられた者もあった。少数なが
ら失望して憤慨した者もあった。夕暮れになると、^{officers}船長たちが船尾から
船尾へ、^{stowaways}旗竿から竜骨へと行き交い、^{rigging}密航者たちを追出し、索き具や
船材から自由になった腕を曲げ、彼らの懇願する声を塞いだ。今や、こ
うした不幸な者たちが岸壁や砂丘の上に立ち、船を眺めながら、報酬や
報償もなく喜んで参加しようとした。^{トッスル}中樯がビシッと張られ、膨らむ
と、甲板からはトランペットの騒々しい音、ドラムの轟、さらにリース
の浜からカースルヒルへと大きな叫び声が起こった。船団は^{signal gun}セイント・
アンドルー号からの信号銃の煙を貫いて、^{stern-castles}金色の船尾楼を海岸に向け
た。

しかし、彼らはその日には、そこで再度係留する予定だった北方のカ
コーディまでのたった10マイルしか航行しなかった。そこで彼らはさら
に5日間留まったが、その間ロバート・ブラックウッド⁷¹とその^{clerk}部下
が、積荷の送り状と明細書の^{last}残りを点検するためにリースからやって来

69 カースルヒルは、エディンバラ城南の堤か？ Harris

70 Caltoun Craigs カールトンの傾斜。Craig はウェールズ語起源の岩、ロック rock
の意味。リースの港から南に傾斜した坂を見上げると、城とカールトン・ヒル
が見えることになる。

71 Blackwood, Robert, Sir., 商人。会社の共同設立者。バルフォアと共に運動に関
わった。ロンドンでの取締役。P

た。彼は同時に、ウィリアム・ヴェッチが今なお自分のベッドを離れられないほど重篤なので、この遠征は彼を欠いたままでは出帆できないとの言葉をもたらした。ドルフィン号の船上にある若き船乗りのデイヴィド・ダルリンブル^{D a l r i m b l e}⁷²は、カーコディの窓や煙突群を見つめ、自分自身の家屋を探した。彼が自分のホームシックに耐えられなくなった時、彼は補給船の船尾を乗り越え、もう一人の脱走者であった、ドルフィン号の甲板長ジョン・ウィルスンと共に、舳先を目指した。彼らは暗闇の中で浅瀬に消えた。

7月18日の月曜日の夕方には〈p.118〉この船団は係留船を捨て、一晩中停泊し、ついに午前中には姿を消した。彼らは早潮に向かって航行し、朝日の中に入った。

彼らは、ウィリアム・パターソンなしには行動しなかった。7月はじめこの会社は長老派に順風を祈る祈禱師たちに指示を与え、トマス・ジェイムズ尊師に改心^{change his mind}の説得を行うのを要求した。感情に訴える1週間にわたった説得を、同程度に熟慮した末に、彼はこの遠征に同行することに同意し、「パターソン氏が赴く以上、彼が、徳の先導者で、悪徳を妨げる者であると信ずるので、他者の範たる者となること」との条件を付けた。理事たちはパターソンをこのような見地からも、またいかなる見地からも、その頃は認めていなかった。彼らはむしろこの男なしに済ませ、もう1週間くだらないお喋りをするつもりだった。しかし、ジェイムズ氏は執拗で、長老派もそうだった。パターソンは理事たちの前に呼ばれて、行く意思があるかと尋ねられた。彼は、躊躇いなくイエスだと述べると、職務も権力も持たず、この遠征の単なるひとりの平凡な構成員ということで彼を認めると告げられた。彼が妻と彼の部下、トマス・フェンネル^{T h o m a s F e n n e l}⁷³を同行させると願い出ると、それは渋々認められた。

72 不詳

73 不詳

土曜日の午後、櫂で漕ぐことによってカーコーディに渡り、そこでピ
ンカートンは快く、パタースンたちのために、ユニコーン号の船縁に細
やかな船室を用意した。降って湧いた幸運だったが、彼が別の植民者た
ちから受けた温かい歓迎が、パタースンの心に芽生えた。時を置かずに
彼はセント・アンドルー号に乗船し、驚く提督に対して、あらゆる備品
には即刻視察があるから、何か不足があれば、理事たちに報告があるの
で、艦隊の出帆以前に善処すべしと告げた。

ベニクック船長は、一言も無駄にはしなかった。彼はパタースンに自
分自身の仕事を怠ることなきようにと述べたのだった。

〈p.119〉

第3章 大洋の入り口

「だが、われわれは耐えた。物事が上潮^{mend ashore}になるのを希望として。」

第1回目の航海、1698年7月から11月まで

事はうまくはじまった。強い順風があり、激しく吹いたので比較的大
きな船なら大檣帆^{メインキャンヴァス}を畳んで航行した。第一日のほとんどは、艦隊は
ファイフ沿岸にとどまり、この岸とマイ島⁷⁴との間を通過した。カー
コーディ出身の馬の飼育係たちが、その出発の知らせをもたらしたの
で、イーリーやセント・モナズ^{E l i e S a i n t M o n a n s}の海岸は⁷⁵群衆であふれ、アンスト

74 メイ島とも。対岸にはアンストラザー。この船団は、基本的にフォース湾沿岸
を東方に進み、北海を北上して進路を西に取り、オークニー諸島とスコットラン
ドの間を通過して、大西洋に出る経路を進む。

75 イーリーもセント・モナズも、フォース湾北部、ファイフ半島の東端の地名。

ラザーとクレイル^{C r a i l}⁷⁶では、手が振られ、聞き取れない叫び声が上がった。夕暮れ前に左舷方向のファイフ・ネス^{F i f e N e s s}⁷⁷を避けて北東微北へ、ベル・ロック灯台^{B e l l R o c k}⁷⁸に向かって、スプリットスルを穏やかな水域に曲げて航行した。夕暮れまで船体を見せず、彼らの船尾灯が、セント・アンドルーズ⁷⁹の砂浜にいた最後の群衆にも見えることはなかった。

船長や評議員たちは、艦隊がラーゴ湾^{L a r g o}を通過するずっと前に、封印されている指示書の最初のを開いた。一行は、オークニー諸島とアイアランドの西側大西洋に進み、北海とイングランド海峡における英国巡洋艦^{クルーザー}^{c u r i o u s}のうるさい監視を避けるはずだった。オークニー諸島では、彼らに必要であったはずの食糧の搬入ができ、それからというもの一路マデイラへと帆を広げるはずだった。ここで第2の指示書が開封されるはずだったが、仮に風や気候によってこの上陸が不可能となれば、この艦隊が北緯32度に到達した途端、書類は廃棄されることになっていた。

第4日目には、アバディーン⁷⁹の北方で、船が風のため進行できなくなり、太陽に照らされる空気がとても穏やかとなったので、トップマストの先端にある船長の三角旗はほとんど動きを止めた。正午には風が生じて、南から微風が起り、この船団は、町民たちが歓迎の意を表して3発の砲弾を発射したピーターヘッド⁸⁰を悠々と通過した。この挨拶は〈p.120〉ペニクックに無視された。彼は自分の船室におり、彼が静寂のうちにセント・アンドルーズ号に乗船を要請したすべての船長と評議員

76 アンストラザー、クレイルはファイフ半島をさらに東行する。

77 ファイフ・ネスは、ファイフ半島の東端。

78 ベル・ロック灯台は、タイ Tay 湾北方の Arbroath アーブローズ近傍にある。L・R・ステューブンスンの祖父、ローバート・ステューブンスンの施工になる、スコットランド最古の石造り灯台が存在する。

79 このセント・アンドルーズは、ファイフにある地名。12使徒の一人アンデレの骨が流れ着いたとの伝承から、キリスト教の聖地の一つとなった場所。

80 アバディーン北方の岬。

たちとの厳しい会合の司会をしていた。彼らは、彼の要求に基づき、彼らの事務長たちによって取り揃えられた彼らの食糧と雑貨の一覧を持参していたが、上記のものの読み上げが、最初は無言の衝撃の、その次には激しい議論の状態を生み出していた。この会社の理事たちは、この Council 会議に臨んで、この食料が9ヶ月を優に超えると想定していたが、果たして事務長たちが報告したのは、それが6ヶ月以上は持たないという確信であった。大部分は、この船団が、バーンティスランドに停泊していた週のうちに消費されてしまっており、残ったパンの大部分は損傷していて、ビーフやポークは積み込み方が悪いために劣化していたのだった。総じて賢明な決定の主催者であり、なんであれ悪しきことに対する不動の批評家たる者を自認していた、ウォールター・ヘリスは、後に、この調査の報告が彼の示唆によって要求されたのだと主張した。彼は自から調査を実施した後、彼は「干した魚を除けば、どの食糧にせよ、使い物になったのは、5ヶ月半分以上ではなかったが、その内訳を言えば、週に4日使うなら、1優に11ヶ月に十分な量だったのだが、ただし、バターやオイルは4ヶ月分ではない」と述べた。

ペニクックの大きな船室での口論や論争は夕暮れまで続き、その時になると、ひどい霧が降り、全船、夕闇^{dusk}にあつて、彼〈ペニクック〉の船尾灯を取り囲めとのペニクックの命令にもかかわらず、カレドニア号がその中で行方不明となった。ロバート・ドラモンドと、彼と同行していた2名の評議員たち、モントゴメリーとジョリーは、太陽の明かりに照らされた霧の上方に、夜明け監視人が、カレドニア号の中檣^{トッフスル}を発見するまで、この提督の船上にとどまることにいやいや従った。彼らは悪い噂を聞いて、彼女〈カレドニア号〉に逃れており、ドラモンドと共に、ペニクックは経験不足の愚か者であると確信していた。この評議会の第一 Council 回目の会合は、その後^{acrimony}に続く苛烈と疑惑からなるパタンを決定した。すでにうちわ揉めが生まれ、嫉妬とか自惚などが、見習い水兵^{landsmen}と船員たち^{seamen}

の間の不和を特徴づけることになった。「われわれの海上指揮官^{Chancellors}たちは」、と1年以上も後になった理事たちへの報告の中で、「ただ、すべてに責任^{take upon}を持つだけでなく、同時にその他の者たち全員を威嚇し意気消沈させたのだが、われわれが上陸する段になれば、事態は改善するとの希望に託して、われわれは耐えていた」と、パターソンは述べていた。彼はその会合には出席しておらず、もしもペニクックがカコーディで彼の忠告を考慮しておれば、そんな不足は早晩発見されたのだと考えることによって、あまり安らぎを得ることができなかった。

〈p.121〉 〈カリブ海の地図のページ、第一次遠征において、ボウネスの希望号、ドルフィン号、オリーヴ・ブランチ号、エンデヴァー号、セント・アンドルー号、ハウブ号、ハミルトン公爵号、ライジングサン号までの、8隻の船舶の遭難場所を示す〉

〈p.122〉 今や、この提督にはオークニー諸島に向けて艦隊を進めることを命じ、そこでリースからのさらに多くの食料が送致されるのを待つことの他に、選択肢はなかった。まもなく、乗組員全体が食料の制限^{rations}を受け入れることになった。7月24日、この船団がダンカンズビー岬⁸¹からオークニー諸島に向かって航行中に再び霧がやって来た。最初は風向きが変わるに連れて霧がゆっくり動いていたが、次に数時間経つと帳が濃く白くなり、船首斜檣^{バウスプリット}の向こうには何も見えない状態となった。しばらくはアラレの中に留まり、セント・アンドルー号の見張りは、各船の名前を高らかに歌いながら、「上首尾！」の叫びが答えると、

81 Duncansby Head、スコットランドの北端とオークニー諸島との間の海域 Pentland Firth に突き出す場所。一般にイギリス本土の最北端と言われているジョン・オ・グローツの3キロほど東の岬。北にはペントランド海峡を挟んでオークニー諸島がある。すぐ近くの海中から二つの岩が65メートルほどの高さ突き出ており、その脇に寄り添う小さな岩がある。この三つの岩をまとめて「ダンカンズビーの離れ岩」Stacks of Duncansby と称する。

「^{G o d G r a n t}神のお恵みだ」と返ってきた。声は一切聞こえなくなると、ペニクックは30分毎に号砲を一発打ち、それに応じて布を巻き付けたマスケット銃による連射を不安そうに数えた。帆を縮めた状態で闇雲に手探りで進んでも、どの船長も確実に自らの居場所を言えず、誰も彼もが暗礁に乗り上げるのを恐れた。こうなればオークニー諸島に停泊するとの考えはなくなり、仮に実際に島影が見えるとしても、この霧と岩礁と逆立つ波から離れるためには決死の希望しかなかった。一旦、霧は晴れたが、北にも南にも、見覚えのない、見知らぬ黒い陸地があるだけだった。ユニコーン号の船上では、誰かが、それがオークニー諸島で、もう一つはシュットランドだという者がおり、それ以外に、あれはアウトター・ヘブリディーズ⁸²に相違ないとも言った。セント・アンドルー号の上では、ペニクックが飛沫の中でトップマストを数えあげ、彼の^{Squadron}一団がまだ共に存在することに対して、神と己自身の技量に感謝した。

しかし、長くは続かなかった。北方から突然の強い風が吹き、北極からの冷たく厳しい、暗い海の流れを伴った。夕方に風と波とが止むと、霧が再び起こり、間もなくセント・アンドルー号への呼びかけの^{G u n}合図に返事が途絶えた。白夜が3日間続いて、その間に、ある種の信じがたい奇跡によって、^{s h i p s}船団はオークニー諸島とシュットランド諸島との間を無事通過していた。7月31日の夜明けに晴れ間が現れ、各船舶は、カモメの群れとともに大西洋に単独の状態となった。^{L e w i s B u t t}ルイス島の先端から離れ、晴れた空のもと、北西からの風を前にして、ピンカートンは、この一団の最南端にいることを確信を持って信じたのだった。彼はユニコーン号の方向を転換させ、^{m a i n t o p}大檣楼の船員に対し北方向を^{e y e}油断なく監視を続けるように告げた。10時前にこの男が船尾後方で叫んだので、ピンカートン

82 スコットランド北西部、ミンチ海峡・ヘブリディーズ海を越え大西洋に面した諸島で、ウエスタン・アイルズとも呼ばれる。ルイス Lewis と Harris、ノース・ユイスト North Uist、ベンベギュラ Benbecula、サウス・ユイスト South Uist、バラ Barra、及び 200 以上の小さな島々が連なる。

は帆を畳み、^{彼女}船が来るのを待った。^{s h e}それはエンデヴァー号で、見つけれ
 れたのを喜ぶ迷子だったが、その^{master}船長ジョン・^{M a l l o c h}マロックは、それ以外の
 船のことは何も知らなかった。彼は^{willingly}速やかに待機するのを厭わなかった
 が、ピンカートンは、順風を無視できず、〈p.123〉右舷のピンク⁸³とと
 もに、^{M a d e i r a}マデイラ⁸⁴に向け、進路を定めた。次の日彼らはセント・キル
 ダ⁸⁵の雲がかかった岬を通過したが、ユニコーン号に乗船していた、青白
 く、みすぼらしい^{landsmen}新米船員たちは、それが視界から消えて海以外に周り
 に何もなくなるまで、岩場のその黒い壁をじっと眺めていた。

8月2日には、^{W r a t h}ロス岬⁸⁶と^{L e w i s}ルイス島との間の^{M i n c h}ミンチ海峡⁸⁷をジグザグ
 に進む時、セント・アンドルー号はドルフィン号を、その後にはカレドニ
 ア号を発見した。両者とも南西ないし南に航行し、それ以外は行方知れ
 ずと考えていた。

植民者たちが^{t h e F o r t h}フォース湾を出発した際にあった高揚した精神の中
 には、今やほとんど残るものがなくなった。彼らの中には、彼らが今なお
 引き摺っているこれまでの恐怖以上に鮮明にかの北方の旅の惨めさを思
 い起こすことになる者もいた。「^{F o r G o d , s a k e}お願いだから」と、ウィリアム・パ
 タースンは理事たちに向かって書き送る。「クライド川から次の船団を

83 2本マストの小型船。

84 北緯32度近傍のポルトガル領の諸島、船団は北緯58度近傍のスコットランド
 西方アウター・ヘブリディーズ諸島から南下することになる。

85 セント・キルダ (St Kilda、スコットランド・ゲール語: Hiort、アウター・ヘブ
 リディーズのウエスタン・アイルズ Western Isles 北方のノース・ユースト
 North Uist の西方64キロに位置する大西洋上の群島。) は、イギリス領の孤立
 した群島。北大西洋、ノース・ウイスト島の64km 西北西にある。スコットラン
 ド、アウター・ヘブリディーズの最西端の島々。最大の島はヒルタ島で、イギリ
 スで最も高い、海岸に面した断崖絶壁がある。

86 スコットランド最北西の岬、片麻岩からなる高さ160メートルほどの絶壁がある。
 その名称は、point of turning を意味する 'hvarf' と言うオールド・ノース語に由
 来すると言う。

87 ハイランド西岸の北部とアウター・ヘブリディーズ諸島のルイス島との間の長
 さ90キロメートル、幅約30から75キロメートルほどの海峡。ノース・ミンチ
 海峡とも。北は大西洋、南はリトル・ミンチ海峡に通ずる。

必ず派遣されることを。なぜなら北に向かう^{passage}旅程はそもそも、インド諸島に向かう全航海をはるかに上回るほど厳しいのです」。情け容赦のない船員たちによって甲板の下に放り込まれると、自分自身の身体からの悪臭や船の揺れのために体調不良となり、ひっきりなしの騒音によって気が変になり、出入り口一帯に広がった霧で息の根を止められ、食糧不足と汚水によって逆上させられ、清潔とは程遠く、孤独にもなれず、今何処にいるのか、明日はどうなるのかも知らされず、太陽はおるか空さえ決して見えず、彼らのほとんどが、船が霧から脱出するはるか以前に、冒険に立ち向かう勇気をすっかりなくしてしまった。彼らにどれほどの強さがあったにせよ、とるに足りない諍いで消耗し、彼らの上に立つ者たちのちっぽけな特権を恨み、彼らの下にある者たちに対しては自分たちのものを了見が狭いことに腹を立てる。強い風の間は恐怖で互いを掴み合うかと思えば、眼を閉ざして死を望んだ。船中にあったパターソン夫人やその他の女性たちがこの苦境をどのように凌いだのか、誰ひとり記録を残してない。ただ、大変若い者だけは勇気を保っていた。コリン・キャンブル⁸⁸は、その家族がこの者が海を生業とするのに十分なことを学び得て、彼の兄弟に代わって筆をとっていた^{journal}日誌に日々記載することをなんとかやり遂げるとの希望を持って、ピンカートンの庇護のもとに、ユニコーン号への乗船に送り出されていた。ひとりの乗務員も評価しなかったが、彼は控えめに受け入れた。と言うのも、彼に進んで、ないしは快く、航海に関するほんのわずかな教訓すら与えようとする者はなかったので。彼は辛抱強く、風向きや天候、緯度の変化、遠く離れて音信のない船舶の観測、ユニコーン号が無風状態で停泊し、オークニー諸島の強風で〈p.124〉破壊された^{trestle-tree}縦桁を修繕するために^{foretop}前檣楼担当船員が檣上に登った日を記録した。8月15日、セイント・ヴィンセ

88 Campbell, Colin. 志願乗務員。ユニコーン号において、ピンカートンの下で修業。日誌を付けた。P

ント岬⁸⁹の西方で、乗組員たち全員の心を励ました、二羽のハトが、船にやって来た。

ピンカートンの後方ではくる日も来る日も、別の3隻の船舶がゆっくりと帆走しており、夜になると、カレドニア号がセント・アンドルー号の点灯をいく度となく見失った。こうして明け方の時間は、ドラモンドのトt o p s a i lップスルが水平線に現れるまで、イライラした遅延の中で浪費された。ペニクックは、ロバート・ドラモンドが意図的な悪意によって、夜間に遅れており、両者の感情は、彼らが再び出港準備をするに先立って船舶の間で交わされた腹立ち紛れの信号によっては改善されなかった。ポルトガルの沿岸を離れると、l a n d o f f i c e r見習い船員たちが、互いに彼らの友人たちや親族たちを訪ねるために、十分なほどこの一団に仕事がなくなって、頻繁に平穏があった。彼らはブランデーを飲み過ぎて、悪巧みが過ぎることもあった。ドラモンド兄弟がセント・アンドルー号にやって来た時、ロバートは青い上着、トマスは赤だったが、自分たちの船上で催されたe n t e r t a i n m e n t宴会が、セント・アンドルー号の船の上で期待されるようなケチなもてなしなどに比べれば、一層太っ腹なものだったと、自画自賛した。ペニクックは、この不遜な蔑みや、彼の主甲板で、赤い外套を着用し、出陣用のカツラを纏って、家族や階級、戦闘、籠城などのような他人の預かり知らない事柄を話題にして、立ちまわる怠惰な男たちの密かな微笑に怒りを覚えた。彼はすでに、陸上集団の指揮者L a c h l a nラホラン・マックリーg e n t l e m e nン⁹⁰船長から彼にもたれされた噂を頭に入れていた。このH i g h l a n d e rハイランダーには、ドラモンド一族（その一員が、グレンコウについて一族の記憶を持っていたと言ってもよい）を嫌うことに対する彼自身の隠された理由があったが、その兄弟たちが策謀を練って、この提督に

89 セント・ヴィンセント岬とは、ポルトガル西端、北緯37度、西経9度の岬ではないか？

90 Maclean, Lachlan, マックレーン、ラホラン。船長。第一次遠征隊で会社の指導者。会社に攻撃を加えた後、ロンドンに戻る。P

対して陰謀を企んでいると述べた。ペニクックが彼らを即座に軍法会議にかけようと熱心だったが、マックイとモントゴメリーが、この艦隊のマデイラ到着まで待つようにと彼を説得した。彼らの意見は、この問題はそこで評議員全員によって議論すべきであると。

8月20日、午後3時、ちょうど西方に向って航行中、ユニコーン号とエンデヴァー号は、前方にマデイラを目撃したが、突然吹き始めた突風が、さらにもう2日間彼らを攻撃した。ついに彼らが停泊地フンシャル^{F u n c h a l}⁹¹に到着した時、白亜の城塞と緑と檸檬色の丘の下には、ジェノヴァ^{G e n o v a}の船舶が停留中で、トランペットを高らかに鳴らして、銃声による歓迎が繰り出された。ピンカートンが接岸し、彼の船員たちは、ユニコーンの銀色のバッジをつけた帽子をかぶって、彼の船員たちはてきぱきと動いた。その村長が、〈p.125〉スコットランド人たちがアルジェリア人海賊の囚われの身になったことを告げた。ただし、彼〈現地村長〉は、ピンカートンが、スコットランドがとても貧しいから、そのように立派な船団を所有するような国ではないなどとイングランド人に広められたはみ出し者^{r o u g e}では全然ないことを今や理解できてはいたのだが。辛抱づよい態度や、この会社の法律の写しを提出したことで、さらにこの会見で最も注意を要する時にユニコーン号から運よく^{providentially}放たれた12発の号砲によって、ピンカートンはこの村長に、スコットランド人こそが、他でもない、彼らがあるべきものとして求めた存在であることをと確信させた。12発の号砲が、その返答としてこの城から放たれ、この島の住民たちが歓迎の叫び声とともに、彼らの葡萄畑や家屋から降り来たった。

警告には十分な理由があった。海賊船^{corsair}にとってゼノヴィーズ船^{ジエノヴァ船}への乗船は、魅力的な^{p r i z e}当たり籤であった。つまり、身代金に相当する^{bishop}コマで、別の言い方ならマデイラの殿方との婚姻が予定された花嫁、彼女の

91 マデイラ島南東部の港町。

持参金^{dowry}と言えは15000ポンド・スターリングだった。「だが、このご婦人は」と、この破格の金額に重きをおいて、その船のキャビンへと好奇心によって導かれたあるスコットランド人が記しているが、「その全てと引き換えるほどの美人で到底はなかった」。彼が面白がったことには、第2番目のゼノヴィーズが1日かそこら^{a day or later}遅れてリスボンから別の花嫁と共に到着したのだが、「最初よりも、格安で、器量もよかった」と。

ペニクックの遅れた船団^{ships}が8月26日に到着した。ため息をつくや付かないうちに、ジョン・マルロツホ⁹²が、ユニコーン号^{pinnace}の軽帆船にいる彼らを訪ね、停泊地に彼らを案内して提督に報告したのは、当初の疑いにもかかわらず、スコットランド人たちは現在、その船団に水の補給と糧食の積み込みを自由^{welcome}に行っていることだった。船団や海岸から次の礼砲が轟いたので、ペニクックは考慮中だった最優先の事柄に注意を向けた。彼はセント・アンドルー号^{ships}の船上で評議員全員による会合を招集した。フォース湾を出発して以来のドラモンド一族の行動は、彼に言わせれば、「反乱の気配が漂ったので」、彼は、彼らから指揮権を奪い、上陸するよう画策した。若きマッカイとモントゴメリーとは、船酔いで元気がなく、ペニクックの背後甲板^{quarter-deck}のからのやり方に辟易して、この航海の終わりまでは、両名ともにこれまで以上に耐え忍ばなければならないことを意識して、彼に調子を合わせるつもりであった。しかし、ロバート・ジョリーとジェイムズ・カニングムとは、中途半端^{middle road}な道を辿るフラフラした風見鶏にして、グレンコウ仲間と言う前科者^{committed member}たちであったから、忍に如かずを主張していた。彼らは、海上にあるかぎり、ペニクックの権威に対するドラモンドの服従を受け合う約束をしており、この確信にもとづく以上、この提督の提案は頓挫していたのであった。

92 Malloch, John. 不詳

スコットランド人たちは海岸に固まり、ワインや、食べ物、さらに娯楽を求めていた。彼らは熟れてない果物を口にして、体調を悪くした。^{officers}士官たちのなかには、〈p.126〉肉を賈うために、赤い上着や白羽の帽子、刀剣や靴の留め金を売却する者もあった。彼らは遭遇した爬虫類の数に驚き、ポルトガル人たちは盗人と同じだと考えたり、さらにはこの島の大多数の貧困状態にあっても、少数のイングランド人商人たちが、かなり裕福な生活状態であるのに気付いていた。パターソンは、しかしながら、こうしたイングランド人たちからの親切に、うれしい驚きを持っており、このことから、スコットランド人たちが想像する以上にこの会社に対する好意があるに相違ないと結論付けていた。

彼は、欠席したウィリアム・ヴェッチの代わりにこの評議会に選出されたと言うことで、滅多にない、晴々とした幸福状態^{euphoria}にあった。同盟を希望して、彼の選出を支持したのは、争っている中のどの一派なのか、分からないが、彼らは、彼らの子供じみた争いへの参加を彼が拒止したため、疑いもなく失望していた。「私は告白しなければならない」、のちに彼は書いた、「われわれの問題^{affairs}が、彼らがこれまで争うのを常として来た諸要素と並んで、騒々しく不穏な性質や傾向とによって不安にされ、混乱させられるのを目撃することが、私を大いに困らせることであった」。彼は、ペニクックによるロバート・ドラモンドとの嫉妬に満ちた争い、それにも増して、両者に対するピンカートンの同情が不足していることに頭を悩ませていた。この理事会が毎週新たな代表^{President}を選出すべきだと言う筋の通らない提案が、上陸が日の目をみるまでは、彼こそが最高にして唯一の権威であるとの提督による声高な主張によってさらに複雑にされていた。パターソンは、週おきの代表というのは「政府が行うただの^{May-game}五朔節の戯れ」に過ぎない、と述べ、彼が提案したのは、各評議員が1ヶ月間執務^{hold the office}を執り行い、植民地に到達したら、その^{the Land Councillors}土地の評議員たちが乗組員^{Seamen}たちを代表して交代するのがよいとした。か

くして、適切な法令や法規を策定し、ベニクックによる短気とか、ピンカートンの無知などによっては覆せない確固たる政府を確保するには、4ヶ月を要することになる。しかし、彼は他の土地評議員たちからは何ら支持を得ることがなかった。「彼らは、賢者たちのように、自らの法廷を開設し、代表権がわずか1週間しかない海上のそれ〈評議員たち〉とあらかじめ合意しておかなければならない」。

スコットランド人たちは、一定の代価で、彼らの水樽を満たすことはできたが、貧困に陥ったこの島には、販売するだけの大量のパンや肉がなかった。エンデヴァー号の積み荷は、27樽のワインと交換されたが、およそ3000ガロンのそれは、無邪気な希望を持たれて、インド諸島で商売になりうるとされたのだった。厳しい罰則への恐れのもと、スコットランド人たちは、この島の住民たちと彼らの事業について議論してはならない、あるいはせいぜいのところ〈p.127〉、ギニア海岸に向けて出発すると装うように申し渡されていた。情け深いイングランド人商人たちはこれに騙されることはなく、その代わり、彼らを惑わして、ロンドンに対しては、彼らの意見として、この集団は確かに東インド諸島を目指していると伝えていた。

9月2日の正午、ベニクックは前方の中樁帆を解き放ち、その船首砲を放った。それは錨を揚げて帆走に入る合図で、船団が移動するにつれ、彼らは停泊地を39発の礼砲の煙によってを満たした。ベニクックは、村長がたった37発だけしか返さなかったので失望したが、彼は几帳面なことに、こうしたことでさえも、ポルトガル人たちがウィリアム王の戦艦隊に示したことを遥かに上回るとの事実を記した。

セイント・アンドルー号は、この提督がその船尾の手すり越しに振り返り、カレドニア号が帆を畳んで、向きを変えたのを目視した時、すでにこの湾の外にいた。ドラモンドの軽帆船が岸辺に漕ぎ寄っていた時、ベニクックはもう一発の号砲を放ち、後樁の中樁帆を引き揚げ、この船団

を再び係留させた。^{Council}評議員会が、彼の船室に召集され、ドラモンドが説明を持参してそれに参加するように命令を受けた。彼はその赤い上着を羽織った兄弟とともに乗船して来たが、彼の第二の同僚が彼に反抗したので、やむなく解任、上陸させたと述べた。彼は激昂したペニクックを大声で叱りつけ、その命令により、彼の乗組員の誰であれ受け入れるか拒否するかの権限を与えたはずだと伝えたが、この理事会は、彼に自ら行動し、部下を再度乗船させるように伝えた。彼は渋々それに倣い、今一度船団は出港した。

その行き先について、今やなんら偽りはなかった。封印された命令の第二の包みがすでに開封され、その内容は何人にも周知されたのだった。

^{Y o u}諸君たちは、これにより、^{Crab Island}クラブ諸島⁹³を目指す航海遂行の命令を受けたからには、本社の名において、これを所有することは妨げられないと理解されたい。さらにこの後、諸君たちは、ダリエン湾へと進み、^{in and about Golden Island}北緯8度周辺の黄金島と呼ばれるところに至る。その後そこで、^{p r o p e r}もしも妥当ならば（われわれは信ずるのだが）、わが国王陛下と友好関係にあるヨーロッパの国民あるいは国家によって所有が行われていない場合には、^{i s l a n d}上記の島嶼同様に^{m a i n l a n d}本土でも植民を行う。

もしもその土地が実際にそのような国によって占領されていることが判明すれば、この艦隊は、所有権が主張されないか、保有されていない^{m a i n l a n d}本土のどこか別の地域に至るまで〈p.128〉この艦隊は順風を背にして進むべきである。もちろん、インド人たちによる場合は妨げられない。

93 カリブ海のプエルトリコ近傍の島、北緯 18.07、西経 65.25。

この船団が、西インド諸島で陸地を発見するまでには、海路で4週間を要した。マデイラを出て6日間で、貿易風に入り、昼夜兼行で平穩な航海を続けた。この船団がファンシャルを離れる前に、4人の男たちが赤痢で死亡し、ダリエンに至る前にはさら36名以上が死亡する運命にあった。しかしながら、死と言うものは、長期にわたる海上航海では、あらゆる船長たちによって織り込み済みで妥当とみなされる、あたりまえのことであって、酢酸液による通常の船舶甲板洗浄や、船倉の燻蒸消毒によれば、彼らは病気を最低限の状態に維持できると考えていた。新米船員たちは血色が悪く、多数が突発的な死を見て気力を失っていた。彼らは、一見すると別の者たちと同様に健康であったが、黒い嘔吐という最初の発作の数時間以内に船外に吐瀉する者たちを目にすると、自分たち自身の健康状態に不安となった。そうではあっても、精神状態は遍く昂っていて、自制心が冷め、時には月並みな喧嘩が慰めとなった。それでもなお飢えはあった。提督、その船長たち、さらに評議員たちは十分な食事がとれ、食卓にはイングランド風の白い食器や白いリネンの一式が整えられたが、さらに下の階級では部下たちの事情はいつも貧弱で、最低のところではひどい欠乏状態にあった。セイント・アンドルー号にいたあるオランダ人が、パンを盗もうと別の人物の戸棚を押し開けた時などは、当人が笞刑を免れえないこととなり、中央甲板でふらついているところで、怒り心頭の男たちが、鞭打ちに加勢することもあった。

もっと残酷な楽しみもあった。「本日」と、コリン・キャンブルは9月10日に書き記した。「われわれは北回帰線を通過したと考えるので、イングランドの習慣に従って、楽しもうと提案された」。ペニクックは、後檣にその三角旗を掲揚し、号砲を放つと、帆を畳んだ状態のこの船はほとんど帆走はしなかったが、「北回帰線をこれまで通過したことがなかった士官や紳士なら誰でも、ひと瓶のブランデー、またはマデ

イラ・ワインを三杯^{p a y}受けるように、そうでなければ三度頭を下げるように命令されたが、それには従った者もあれば、そうしなかった者もあった」。船長たちや評議員たちは、セント・アンドルー号に乗船し、1時に正餐をとり、5時までポンチを飲み、6時まではパターソン以外は全員、それぞれの船で酔い、そして眠った。

この祝典^{celebration}は成功ではなかった。「天候の暑さとポンチが」と、ロバート・ジョリーは回想している。「何人かの指揮官^{commanders}たちの気分^{ユーモア}を変え始めた」。これまでの様に、飲み物がベニクックの判断力と理性を歪めて、第2、〈p.129〉第3番目の宴会^{b o w l}では、彼がどうしたことか、マックイとモントゴメリーの両名に対して何となく反感を持ってしまった。彼らをこの上もなく厳しく取り扱いながら、ジョリーは用心^{cautious}深い非難を込めて述べたが、彼は彼の第1の、第2の、そして第3の盟友に対して過ちを犯すことを開始し、それから後には、彼の船上にいる全ての英国兵士官たちに向かった。ウォルター・ヘリスは、すでにベニクックにくっ付いており、今となればそれによって過ちを侵してしまったかも知れないと考えつつ、この男を影に隠し、彼に対して、彼がもはや国王の船には乗っているのではなく、これらの兵士たちは母国で勢力を持つ男^{gentlemen}たちだということに思いを致すように言い聞かせた。この台詞の力が、常にベニクックにとって掛け値のない効果を持っており、彼は最後に^{held his tongue}黙り込んだ。

ドラモンドたちとサミュエル・ヴェッチは、この子供じみたやり方を^{sour satisfaction}複雑な満足を持って見つめていた。ベニクックに反感を持ち、彼が敵を作るのを見ることを悦んで、彼らはさらにこの評議員会なり、その権威に敬意を払わなくなった。ジョリーは、彼らが再び諍いを開始したと記したが、彼とカニングムに、この理事会^{Council}には1名かそれ以上の土地役人^{Land Officers}、それはトマス・ドラモンドとヴェッチのことに違いなかったが、を含めるべく拡大されるべきだと主張する様に求めた。もしもこれ

が日の目を見たなら、つまり「もしも食糧の不足などのために」反抗とか、騒ぎが起こったとしても、彼らがこの集団companiesに対して所持する指揮権によって容易く鎮圧されうるだろう」と彼らは述べたのだった。それはおそらくは差し障りsのない忠告ではあっただろうが、ロバート・ジョリーには衝撃であった。彼とカニングムとは、評議員としての自分たちの權威を頼みにして、この問題についてそれ以上口にしないようにと、大袈裟な命令を出した。ドラモンドたちとヴェッチとは、二人の男たち双方を、弱虫と決めつけたが、実際に彼らはその通りであった。

そして再び西に向けて、風は東南東から東北東へと向きを変え、お終いには、空気が焼けるように動きを止め、息苦しく、吐き気のする状態となる不安な静寂の1週間がやって来た。船舶用助材の間でタールが泡立ち、時として1日に2、3名が命を失うこともあった。士官たちや志願者たち、入植者たちや船乗りたち、船医の助手や士官候補生たち、樽製造人や大工の少年などが、瞬く間に病気になったかと思えば、あっという間に亡くなり、手短なお祈りをしてさっさと船外に摘み出された。評議員たちは仰天して、予防薬としてのワインの放出を命じたが、ほとんど効果はなかった。日誌係は、悲しい別れをひとつひとつ簡潔に記した。午後2時頃、アリグザンダ・オールドー⁹⁴と呼ばれた船乗りの一人が衰弱のため落命して、とつてき投擲……この日、ディエル船長⁹⁵の仲間の紳士ロバート・ハーディ⁹⁶……、ジョン・ステュアート⁹⁷という紳士……、船員スミス⁹⁸……コリン・キャンブル船長⁹⁹隊所属の一名の軍曹Sergeant (p.130) ……熱病で死亡……fl ux赤痢が原因で……船から水中に投じられる……

94 Alder, Alexander, 不詳。

95 Captain Dayell, 不詳。

96 Hardy, Robert,

97 Stewart, John,

98 Smith

99 Captain Colin Cambell 船長、後年第一次殖民地の評議員。ペニクックの死後、セイント・アンドルー号でジャマイカに赴く。P

9月28日の正午前に、先頭の見張りの一人が、待望の信号だったが、ジャッキと軍艦旗を持ち上げ、ほどなく全船の監視係たちが、陸地、前方に陸地と叫んでいた。^{bow-wave}船首波の上におら下がるトビウオや、ゆっくりと旋回する^{man of war}グンカンドリ¹⁰⁰が飛び立った日々によって、それに対する希望はあった。「われわれは、われわれの^{h e a d}前方に発見した」、とセイント・アンドルー号に乗船していた日誌係は書いた。「^{D e z a d a}デザダ島、英語で言えば^{desire}願いの土地、コロンブスがこの海域に到着した¹⁰¹時、彼が目にした最初の陸地であった」。そこを通過したのは、午後遅く、その向こうには、^{G u a d a l o u p e}グアドループ島¹⁰²の夜に溶け込もうとする紫の影があった。その海には、その日忌まわしい赤痢によって死亡した船員アンドルー・ベアド¹⁰³の遺体が委ねられた。

この船団は^{f l e e t}夜間にはあまり進まず、夜が明けると爽やかな風を^{before the wind}追手に北西に帆走して、アンティグア島¹⁰⁴とモントセラト島¹⁰⁵の間を通過した。正午になると、特に意識しない瞬間に、^{uncharacteristic sentiments}ペニクックがフォース湾に浮かぶバスロックを思い出すことになったのは、小さな^{R e d o n d a}レドンダ島の際のことだった。郷愁は、土地に特有のものだった。日の光の中で緑色の宝石のように輝くリーワード諸島に囲まれ、スコットランド人たちは、岩や、丘の先端、湾曲した入江、つまり故郷の思い出で彼らを元気づけることができる木々の群生を探し求めた。午後3時にはネヴィス¹⁰⁶

100 軍艦鳥、グンカンドリ科の大型海鳥の総称。世界に5種、いずれもよく似ている。全長90センチメートル。翼開張約2.3メートルに達する。

101 1492年10月11日の上陸地は、サン・サルバドル〔現ロング島〕で、英名ワイトリング島である。コロンブス/林屋永吉訳『全航海記』岩波文庫、2011年45ページ。

102 ウィンドワード諸島 Windward Islands 北部の島、西経61度、北緯16度近傍。

103 Baird, Andrew, 不詳。

104 Antigua 西インド諸島東部、Leeward 諸島中部の島、西経62度、北緯17度近傍。

105 Montserrat 西インド諸島南東部、Leeward 諸島の島、面積98m²、首都Plymouth。

106 ネイヴィス島、西インド諸島東部、Leeward 諸島中部の島、首都：チャールストン。

を通過、沖合に停泊した見知らぬ船舶に敬意を評して軍旗を掲揚し、当たり前以上の想像力を持って、彼らは互いに、楔形の島がリースの通りから見た場合のエディンバラのカーズル・ロックに似ているなどと言い交わした。その夜、船医の助手だったウォルター・ジョンストン¹⁰⁷の遺体が、船外に降ろされた。熱病にかかって、彼は自分の身体に己の習得したところを試みたが、「両腕laudanum liquidumにアヘンを投与した結果、あまりに多量を使用したため、眠るように命を失った」。

翌日の正午までに、この船団はサンタ・クルズ¹⁰⁸の南東7リーグのところ

に到ったが、風のない日で、深い青空を背景に船の帆が白く染まった。^{Landsmen}新米兵たちが船舶の手すりにほんやりともたれて、帆柱に向こう見ずに飛びつくカツオドリ¹⁰⁹を眺めているところ、評議員たちや船長たちがセイント・アンドルー号に乗船して来た。彼らはペニクックの重苦しい船室で会合を持ち、その後部の窓は〈p.131〉、疲れ切った面々に波紋をつけるような太陽の反射や、その外の物憂げな空気がほんのわずかでも動いても捉えられるように大きく開かれていた。提督は、^{the Drummonds}ドラモンドたちについてまた不平をもらし、できる限り早く彼らを接岸させて、投票を強いたが、さらにもう一度ジョリーとカニングムが、植民地に到達するまで、この縁起u n h a p p yの悪い問題をそのままにするよう、評議員会のその他の構成員を説得した。決定すべきもっと重要なことがあったのだ。彼らの第2の航行命令によって、今や彼らはビエクス島^{Crab Isaland}*に進むはずであったが、彼らには、彼らをダリエンに連れて行くことができる水先案内人を見つける必要もあった。この海域に経験があったのは、そ

107 Johnston, Walter, 不詳。

108 西経 63 度、北緯 18 度近傍のヴァージン諸島サンタ・クルズ St.Croix か？

109 英国最大の海鳥で、両翼端間の長さは 1.8 メートル近く。冬季には渡りをする。餌を得るためには、羽を半分ほど閉じたまま急降下、時速およそ 96 キロで海中に突入する。ノース・ベリック近傍のバスロックのカツオドリは紀元 600 年頃に書かれたアングロ・サクソンの詩『海ゆく者』に記されていると言う。

ここではただパタースンだけであったし、さらに彼〈パタースン〉こそがそうした人間に心当たりがあり、かつ見つけることもできるとの希望もあって、最終的に了承された提案には、彼の助言が影響することになったのかも知れない。艦隊は二手に分かれ、ドルフィン号と（パタースンも同乗する）ユニコーン号が北に向かって、サンタ・クルズ近傍を東に、セント・トマス¹¹⁰のデンマーク島に向けて出帆し、もう一方が、^{Crab Island}ビエクス島に向けて、北から西方に航行することになった。^{ships}船団は日没後に別れ、それぞれ別れの号砲を放つと、その煙が藍色の夕暮れに白く、光り輝いた。

*プエルトリコとヴァージン諸島の間にあるビエクス島 Crab Island。

10月1日ユニコーン号と補給船はセント・トマス沖合7ファズム¹¹¹のところに係留して、ピンカートンとパタースンとが岸に漕ぎよると、砦からの号砲で歓迎が続いた。^{lonely}友なきデンマーク人たちは、スコットランド人たちを歓迎して、彼らにサトウキビ、パイナップル、ラム酒などを提供したが、ピンカートンは不安げだった。ジャマイカからの4隻のスループ船がこの島の沖に停泊しており、そのうちの1隻が、ユニコーン号をもっとよく見るためにやって来たが、二日目に船長自身が乗り込んでくるまで、何ら信号も送らず、ボートも派遣しなかった。彼は、ニューヨーク経由で食糧の荷をキュラーソー島¹¹²にとやって来た、リチャード・ムーン¹¹³だと述べたが、パタースは、たちまち、彼が^{long years before}昔に知り合った男であることを認めた。彼らは互いにヒシと抱き合

110 ヴァージン諸島、シャロット・アメリ Charlotte Amalie のセント・トマス St. Thomas 北緯 18 度、西経 65 度か？

111 海上での測量単位、1 ファズムで 6 フィートで、およそ 1.828m に相当。

112 ベネズエラ北西海岸沖、オランダ領アンティル諸島の主島、面積 461 km²、首都 Willestad。

113 Moon, Richard, ジャマイカの船首でパタースンの友人。第一次殖民地に食料を運搬。P

い、ムーンはビエケス島がキュラーソー島よりも近いから、彼がそこに出向き、スコットランド人が保有するどんなものでも食料と交換するの
が、簡便だろうということで合意した。

パターソンはおまけに、海岸近くの居酒屋で、いたましくも年老いた
上に白髪で、口数の多い海賊のロバート・アリストン¹¹⁴という水先案内
人を見つけた。しかしながら、彼は自分にはかなりの自負心があり、彼
らの欲する本土^{Main}のどこにでもスコットランド人たちを降ろすだけの自
信を持っていた。彼はパターソンの船室でしこたま飲み、古い昔や、す
でに過去のものとなった苦い移り変わり^{change}を涙ながらに後悔を交えて語っ
た。〈p.132〉パターソンは、あのキャプテン・シャープ——ポルト
ベロを略奪し、ダンピアやウェイファと共にあの地峡を横切った、バツ
ト・シャープのことを知っていたのか？ イングランドでの絞首刑を逃れ
た後、シャープ船長は、今度はデンマーク人たちに捕らえられ99年もの
間投獄されたということをパターソンは知っていたのか？ そして、彼ら
が定住を望んだダリエンはどこにあったのか？ 彼はそのことをよく覚え
ていた。

こうしたジャマイカ人の別のスループ型帆船についてなお動揺しなが
ら、ピンカートンはその4日後に錨を揚げ、彼自身の船団^{ships}と砦の壁から
の70発の轟^{roar}に合わせて出帆した。

ペニクックの一団^{squadron}は、10月1日にビエケス島を観測して、上手回し^{うわてまわし}¹¹⁵
し、錨を下ろす〈停泊する〉前に24時間もジグザグで航行した。その島
は、豊かな緑色の木々でほとんど全部が覆われており、その名の由来と
なった巨大なカニ以外に住むものもなかったが、ロバート・ドラモンド
が島をその周航するのにカレドニア号を使った時、狭い湾内に隠された

114 Alliston, Robert, アリストン、ロバート船長。海賊。パターソンの友人。クラ
ブ島からダリエンへの最初の航海で水先案内を務めた。P

115 船首を風の方に回し、ついで反対側から風を受けるようにする。

デンマークのスプール船を発見した。ピンカートンに対する彼の寛大な厚遇hospitalityにもかかわらず、セイント・トマスの総督Governorは、ビエケス島に対するデンマークの所有権を主張enforceするためこの船の航行を静観し、デンマークの船長がさらに海岸にテントを設営し、国旗を掲揚することによってその点を強調した。ペニクックはこれに答え、その島の反対側の木々の下に彼自身のテントを張り、なおかつ彼の三角旗、会社の標準旗standard、加えてスコットランドの聖アンドルー十字を靡かせた。彼の日誌によると、デンマークからのこの抗議は、脅しというよりも形式的儀礼であったのだが、「彼らは、彼らの宮廷の意にかなうようにそうするのを迫られたのだが、彼らは、一意専心われわれがそこに植民するのを望んでいた。というのも、そのためその後彼らは、彼らと、誠に煩わしい隣人であったスペイン領ポルト・リコbulkward116との間に堤防を作ったのだから」。デンマーク人に強く印象付け、彼自身の自惚れ示すために、彼がこれを信じたかどうかはともかく、彼はさらに60名の部下たちからなる英国兵を上陸させ、彼らの尊大な太鼓の響きが、丘陵を挟んで、朝夕に響くことになった。

10月5日、雷鳴と稲妻lightningと大雨の日であったが、ピンカートンの船団shipsがジャマイカのスループ船と共に到着した。リチャード・ムーンは、積荷表loading-listsと、カツラや靴下、靴やスリッパなどの陳列見本、格子模様の肩掛けや目の粗いグレー生地、縫針、釘や角製のスプーン、聖書や教義問答書Catechismsなどに容赦無く目を配ったが、彼が欲しいものは皆無で、スコットランド人が要求するようなどんでもない値段では絶対にダメだと決めつけた。ニューイングランドのこの会社の代理人宛の手形によるなら彼の在庫から何も用立てないと。彼の言うには、キュラーソー島に渡り、〈p.133〉そこで自分の荷を奴隷と交換するつもりだ、と。パ

116 プエルト・リコの旧公式名、1932年まで。

ターソンはここに危険を察知し、^{the Council}理事会に対して、スコットランド人たちが自らの商品に対して高い価格をつけているなどと、もしもムーンがふれ回ったとすれば、そのことによって、別の交易人たちがこの植民地を訪れる妨げになると伝えた。損をしてでも売りに出して、危険を避ける方がよいと。「このすべてに対して、私は、彼らは、諸商品に過剰な価値を付与しているとか、それを下手な買い方をしているとか言うことに対して、いかなるものであれ特定の人間の主張に関心を寄せる必要はなく、むしろその原価が会社の送り状にあるものと同じだとみなされるのを強いられていたのであって、彼らはムーン船長による強制はそれほど強いものではないと、返答した」。

ムーンは肩を縮めて、出航の備えをした。このような馬鹿者たちが何を考え、行うのかは、彼にとってさしたる意味ではなかったが、彼が出発する前に、パターソンのたつての^{appeal}訴えにより、一旦それが^{settled}決まった以上、この植民地に食糧を運ぶ、あるいは送致するのを約束した。もしもスコットランド人たちが友人を見つけることがなかったとしても、パターソンは少なくとも敵をつくることから彼らを救ったことになったのである。

ペニクックのリチャード・ムーンに対する^{high-handed}高飛車な蔑みは、^{Council}理事会を交易人に敵対する方向に転じさせた。自分の居場所に腰を下ろし、手にはグラスを、自分の椅子の後ろにはカツラを、さらに入り口には歩哨を待機させて、この提督はと言えば海上にいた時と同じ、大声の^{bully}威張りだったから、彼とその仲間たちからなる船長たちが、万事に対する最良こととはの何かを弁えていると確信を持っていた。パターソンと言えば、物事は上陸すれば改まると言った彼の当初の希望が過ぎていたことを思い知ったのだった。「われわれの^{Masters}主人たちは、海上では、われわれ未熟な者たちが、^{salt-water}航海に慣れた仕事のことを何も知らないとわれわれに^{sufficiently}繰り返しお説教を垂れてきたが、陸上にある場合に彼らは、わ

れわれよりも何事につけ弁えていると受けあってきた局面^{chase}をわれわれに転換させるようなことは到底ありませんでした」。ベニクックは、ドラモンド一行とヴェッチに対して策略やよろしからざるゴシップのためにその才能を発揮させてきたヘリスによって、今やすでに見捨てられてしまった。さらに、この提督^{A g a i n}が軍法会議を要求して、この兄弟たちとその友人がセント・トマスの海浜に遣わされるべきだと主張すると、あろうことかカニングムとジョリーが、彼に反対の投票するように変わったのだ。ドラモンド兄弟に対するパターソンの敬意は（こうした観察力のある人々はただ、彼を侮辱しているだけだが）、彼らの気まぐれは時として耐えられないのではあるが、彼らを失うのは割りに合わないと、評議会^{C o u n c i l}を説得した。

水桶が一杯になって、出発の潮時となった。彼らの出港命令は、スコットランド人たちに、占領状態ではないことが判明すれば、あるいはその小さなスloop船とか14名の武装人員たちなどの、図々しいデンマーク人たちと論争に値する点があるとは誰も考えないなら、〈p.134〉この島に定住するために出発するように指示していた。この船団は10月7日金曜日の正午前に、ジェイムズ・パターソン、紳士、さらに農園主^{p l a n t e r}トマス・ダルリンプル¹¹⁷、両者共に赤痢で死亡したのだが、その遺体を投擲した後に、出帆した。波、風、さらに軋むロープの音に加えて、スコットランド人たちは、海鳥の悲しい鳴き声、後景に退く森の中で興奮した猿たちのざわめきを聞いた。一人の男が残されたが、それはマイケル・ピアスン¹¹⁸という者で、マククリーン^{M a c c l e a n}船長^{company}の一団と共に^{s t o o d a s h o r e}浜辺で歩哨に立ったが、^{s o f a r}それまでに何が起こったのか、さらに、この^{f l e e t}船団が出帆した時、何がやって来るのかをに思いを致した。彼はこの島

117 Darrymple, Thomas. 不詳。

118 Pearson, Michael 不詳。

の穏やかな美しさに魅惑されて、自らのマスケット銃を携えて森に逃れた。

3週間にわたり、この艦隊は南西に、あの地峡を目指してカリブ海を横切った。それは、いやな臭いのする無風状態と猛烈な強風があるきびしい時間であった。乗組員の誰一人として、そのような嵐、熱の中から突然吹き上がる風、帆桁seam enよりも上でうねる海面、船員が驚いて見上げると、セント・アンドルー号の水夫長をほとんど隠すほどに夜の間明るく持続した光、などを経験したことはなかった。25人の命が熱、赤痢と絶望によって失われ、その中には、チャールズ・フォーヴズ大佐のcompany中隊にいたジョン・ヘイ大尉lieutenant¹¹⁹の若い妻もあった。彼女は、別の強風が起こったその早朝にユニコーン号から船外にturned転落したが、彼女への別れの辞は、main-topgallant sailメインゲルト・マストの帆がその帆桁を離れた時のような、引き裂かれるような口上であった。どの船の上でも、病人が自分の汚物filthの上に横たわり、デッキの縦揺れと風による終わることのない騒音で悩まされていた。焼けつくような渴きを癒すにはほとんど水がなく、そう考えると、キュラス島への上陸は直ぐにもつれた話となり、船上にいる者はいかなる時でも溺死する可能性があると考えられた途端に、彼らの生死がほとんど意味がなくなった。彼らは世界の果てにやってきたはずが、陸地は何処にもなかった。はたして、年老いたアリストンが、セント・アンドルー号の舵手の傍に立ったまま、近い、とても近いと断言した。そうすると、その次に突如として、芝居でも見るように、それはそこにあらわれた。

「今朝の2時ごろ」と、10月17日の月曜日に、ある日誌係は書いた。「われわれは、あかりによって、黒く、高い陸地のような岩石を見た。われわれは、break of the day夜明けまでにわれわれの帆のほとんどを降ろしたが、その

119 Hay, John, 不詳。

時には、それが実際に陸地であって、桁外れの高さにあることが分かった。…」暗い断崖が霧の中から現れ、海から空へと威嚇するような壁で、おまけに斜桁帆スプリットスルの先端を遮ぎる海水は奇妙にも黄色だった。アリストンは、この荒れ果てた海岸を識別して、recognised、〈p.135〉船尾の聖母と自らのNostra Signora della Popaの日記に、その言葉を発音通りに書き記したペニクックに困んで、それに名を付けた。それは、スペイン人の殺戮をかい潜った時の不運な記憶を持った海賊が口にした、カルタヘナCarthagenaに近い、スペインの領土であった。その午後、優れた水先案内によるというよりも、消去法によって、この船団がダリエンを探索して西方に巡回した時、風が止み、海は静かになった。まだ黄金色で、海水は船の航路wakeの中で豊かなクリームのように巻き上がってはいたが、アリストンは、それが、彼には名前が言えない、ある大きな川からやってくると述べた。しかしながら、それは希望、黄金、そして豊かな前途の色であった。

さらに2週間が過ぎた。during the dayその日いっぱい西方に船団を運んだ風は、夜になると向かい風が変わった。意気消沈させるような静寂の長い時間、ドルフィン号が大一接橋メイン・トップマストを失って、危うく沈没しそうになった激しい突風の一瞬もあった。時には、左舷には陸地、高い崖、遠く離れた森の驚くような緑、白い砦、危険な寄せ波の長いうねりなどもあった。さらに死亡が続いた。熱病に罹った3名の海軍少尉midship-men、赤痢にかかった兵士たち、「衰弱した」若い志願者なども。グラブベットのウィリアム・ベネットGrubbet 120卿の息子のアダム・ベネット¹²¹、その上にカープリントンのウィリアム・カニングム¹²²の兄弟だったアダム・カニングム¹²³、両名は、この会社のための仕事を確保できるようその家族に強く願い出た熱意ある若

120 Grubbet, Sir William Bennet of, 不詳。

121 Bennet, Adam, 不詳。

122 Cunningham, Sir William, Carprington, 不詳。

123 Cunningham, Adam, 不詳。

者たちであった。陽気な若い志願者であったヘンリー・チャーターズ¹²⁴が死亡し、さらにマルビン¹²⁵と呼ばれたひとりのイングランド人船員が死亡した。しかし、人々を、特にパターソンの涙を誘った死亡は、尊師トマス・ジェイムズ¹²⁶氏であった。彼は友人と一緒になければ船出を拒否していた。その遺体が海に滑り落ちた時、それに対して4発の銃声が放たれた。

その月の終わりが近づくと、船団は少し前進できるようになった。大きな潮流、それは海の動きか、または別の川の流れだったかも知れないが、それが東の方向に彼らを引きずり、彼らはそれに対して力なくジグザグ航行を迫られた。ついに、10月26日、右舷方向に緑色の上陸リボンを付けた錨を10ファズム¹²⁷まで降ろした。アリストンは、それがどう言うことか、言おうともせず、言うこともできなかった。しかし、彼はそれがダリエンであることを明らかに望んでいた。真水を求めてユニコーン号から小舟が1隻派遣された。それが戻った時、その桶はまだ空っぽで、乗組員たちは川を全く発見できなかったが、その代わり彼らは、大きなペリカン、百匹の死んだカツオドリや、ペロペロ舌を出している活きたトカゲを持ち帰った。

〈p.136〉船団は、再び西方へと2日間移動した。空気中の陸地の臭いが濃厚で、夜になると遠くからの音がした。日中は、イルカが船団に付き添い、その七色に変化する背中を見せながら弧を描いた。しかし、誰一人としてこれを捉える力を発揮したものはなかった。奇妙なイライラが全員に降りかかった。甲板が頻繁に酢剤で洗浄され、手すりは煙で浄化されていたが、病気が増え、さらに7名の若者が亡くなった。アリスト

124 Charters, Henry, 不詳。

125 Malbin 不詳。

126 James, Thomas, 不詳。

127 1 ファズムは、6 フィート、およそ 1.8 メートルとされるから、その 10 倍。

ンが、彼らがもうすぐダリエン湾と黄金島にいるに相違ないと頑なに主張したが、彼を信じるものはほとんどなかった。さらに、10月28日金曜日の午後8時、彼はここがそこだと断言した。セイント・アンドルー号の舳先^{larboard bow}には、暗い森からなる砂州、白い波つまりは白い砂からなる波打ち際があった。カレドニア号とエンデヴァー号は見張りとして沖に向かったが、その他の船舶はその位置で錨を降ろした。

暗くなる前に、2隻のカヌーが海岸から現れ、スコットランド人たちが彼らに気がつく寸前に、何人かの彩色^{painted}したインディアンたちが大胆にも、旗艦側面に登り^w上部甲板^{a i s t}中央にやって来た。彼らは友好的であるのみならず、恐れを知らない者たちで、手にした弓の弦を外し、槍も構えを解いた状態だったが、当初は何も語らず、優しい眼でスコットランド人たちを恥ずかしげに眺めていた。「われわれは彼らに食べ物と飲み物を与え」と、ペニクックは記した。「彼らはそれをととも快く、片付けた。少しも残さず^{t h e l a s t}に」。もっと正確には、彼らの羞恥心を解いた途端、彼らが会話を切望したのだから、これは必要ではなかったことだったが、スコットランド人たちは、彼らをわざわざ酔わせてしまったのだった。彼らは英語の片言を、ベンジャミン・スペンスが通訳のために駆り出された程の、よくも悪くもない<半端な>スペイン語を話した。彼らは提督の赤い三角旗が、セイント・アンドルー号の船首倉から靡くのを目にして、それをイングランド国旗^{f l a g}と考えたのだが、と言うのも、彼らがそれを彼らの海賊仲間の船の上に行く度となく目にしていたからだった。例えスペンスがその説明を試みたとしても、イングランド国旗とスコットランド国旗の相違を彼らが理解したかどうかは疑わしい。と言うのも、彼らは2年もの間この船団を待ち構えていたのだったし、彼らの国民がスペイン人^{S p a n i a r d s}たちとの戦闘状態にあったので、彼らに会えたのは好都合だったのだから。深夜までに彼らは飲酒のために前後不覚となり、古びたフェルトの帽子、ナイフ、さらにいくつかのほとんど価値のない

姿見などとともに彼らが放り出されるまで甲板の排水溝に横たわったままであった。「そのことによって」、とペニクックは書いた。「彼らは大いに気をよくしたようだ」。

朝になると、再びアリストンは意見を変えた。この船団はその湾内ではなく、黄金島から数マイルのところにある、カーリット湾¹²⁸の東方2リーグ¹²⁹にいた。提督は、前の晩に彼らが歓待し、オンドリ、メンドリ、その上に野生の七面鳥を与えた、他ならぬあのインディアンたちだったと船員たちが気がついた、あの湾に、3艘の小舟を送った。それ以上に有益だったのは、黄金島は西方に3ないし4リーグだと言うインディアンたちの断言であった。赤痢で死亡した2人の紳士たちを水葬した後、船団は錨を揚げて、カレドニア号とエンデヴァー号とに沖合で合流し、快晴のうちに西方に帆走した。

デイヴィド・ヘイ¹³⁰とジョン・ルッカスン¹³¹をユニコーン号とセイント・アンドルー号から水葬に付した10月31日月曜日の午後4時、黄金島の青い頂だと、前方に叫び声が上がった。夕暮れまでに、船団は1リーグ以内に至り、25ファズム¹³²で投錨した。その晩、別の志願者が死亡した、しかし、船上では死亡にも階級の気配があったが、誰もが病気で死亡はもうこれまでと考えるかのように、救われたという大きな共感や心の安らぎがあった。

船団は、明け方にその島を目指して移動し、再びそこから半マイル以内のところに停泊した。空では海鳥たちが、風に吹き飛ばされた木の葉のようにギッシリと集まった。5隻の小さな船の上に立ちほだかる、

128 Caret Bay カーリットベイ、ダリエン 近傍の小さな湾。

129 距離の単位、時代と国によって異なるが、英語圏では約3マイル、4.8km。

130 Hay, David 不詳。

131 Lucason, John, 不詳。

132 海の測量単位、6フィート = 1.829m。測深の結果25ファズムだった？と言うことか？

巨大な岩は、きらめく木々によって覆われており、その黒い崖に存在する唯一の裂け目は、ただ一つの上陸地点で、砂でできた狭い入江であった。アリストンは、それをよく覚えていた。1680年に彼らが丘を超えてサンタ・マリアを襲撃する前には、ここに海賊たちの集結点^{the rendezvous of the buccaneer}があった。ここでは、多くの船から日焼けした男たちが集結し、彼自身もその中にいた。シャープ船長が自分の結集の旗に緑と白のリボンを結び、クックは味方のための手勢と武器^{sword}をかき集め、ソーキンスは黄色い線で彼の赤い旗に色をつけた。大火事、岩場の上の剣の響き、老いや絞首刑執行人によって息の根を止められた、血塗れで黄金色をした久しき昔の夢などもあった。もしもアリストンがこうしたすべてのことを後悔を持って思い起こしたとしても、彼はこの思いを心に止めたであろう。彼の仕事は、かつてはいかほどの価値があったにせよ、今や終わったのである。腕によってと言うよりも幸運によって、彼はこのスコットランド人たちが彼らが赴きたいと願ったところに導いたのだった。

その午後、ベニクックは評議員たち^{Councillors}を彼の船室に召集した。彼らの語り草だった、壮大なダリエン湾が、どこにあるのか、それともないのか、黄金島は確かに現実のものなのか。朝の霞が晴れると、数マイル離れたところに本土が見えたが、これこそが疑いもなく彼らが入植するところであった。南東には自然の港への入り口となるべき〈p.138〉ものが見えるはずで、その島の沖には安全な停泊地はまったく存在しなかったもので、すぐさま探検をすべきだとの合意がなされた。

ベニクックが軽帆船^{ピンナース}でそれに向かった。彼が発見したのは、それが海から遮られた高い地面からできた狭い半島によって形成された広い湾で、その入口のいずれの側にも、彼の限定された知識によっても防衛のための台にはもってこいの優れた場所^{batteries site}と認められる高い丘があった。その湾の青い水は静寂で、砂浜ではほとんど動きがなく、それと境界線を接するマングローヴの向こうには、遠く離れた山々のエメラルド色の

尾根に向かって登り下りがあり、起伏のある手付かずの森であった。
 軽帆船は入口の見張り場の岩を通過し、オールを嵌めた。スコットランド人たちは、緑の森、灰色の足をなすマングローヴを眺め、見たことのない珍しい鳥の鳴き声に耳を傾け、この陸地の奇観に驚嘆した。

ペニクックが遠くの砂浜に白い旗が揺れるのを眼にして、軽帆船にそれに向かうように命令を下すと、そのあと、20名のインディアンたちが手に手に弓や槍を携えて森から出て来て、再びオールを積み込んだ。スコットランド人たちとインディアンたちは、後者〈インディアンたち〉が弓の蔓を緩め、その槍を投げ出し、ピンナースに合図を送るまで、互いにジッと見つめていた。ペニクックは、彼の船員の一人に海岸の方に泳いで行くように命じたが、そのことをこの者は疑いもなく不承不承で行ったのに対して、彼が戻った時には、インディアンたちは交友関係を望み、彼らの^{great captains}大指導者たちの一人が翌日に船団を訪ねるはずだと報告した。

その晩、夜明け前に、パターソンのよき、忠実な部下だったトマス・^{F e n n e r}フェンナーが死亡した。

「この港は、1千艘の帆船を受け入れることができる」

カレドニア、1698年11月

(続く)

3. あとがき

最後に、参考文献の追加と、若干の注記への補訂をしたい。今回に限らないが、プレブルが巻末に整理した主要人物リスト以外に、少なくともい調査が必要である。ざっとではあるが、手元の参考文献では、プレブルのリストでさえ、およそ30%程度しか捕捉できない。今回、プレブルに依存せざるを得なかった人物の詳細については、プレブルを踏襲し、その人物の説明の後にPを付けた。今後可能な限り補訂をしたい。¹³³

133 原書47ページへの注として、地名：ダウンズにイングランド南東部の地名としたが、注記したい。

ダウンズは、J. スウィフト『ガリバー旅行記』の第一、第二、第三、そして第4の航海から、1702年4月13日、1706年6月3日、1710年4月10日、1715年12月5日にガリバーが帰還したが、その帰港地はいずれもこのダウンズであった。

また、その場所の景観または情景は、シャーロック・ホームズ全集「ライオンのたてがみ」Adventures of Lions Maneにおいて、白亜層の海岸にあるホームズの別荘に簡潔に描写されている。偕成社版『シャーロック・ホームズの事件簿下』1985年、p.112を参照。

原書59ページに登場した、ジョン・ブラッカダー陸軍大尉は、ジョン・ブラッカダー陸軍大尉に訂正したい。Blackadderを「ブラッカダー」と訳者は表記したが、ベリック・アボン・トゥードと言う、スコットランドでもイングランド東海岸に近い、チルンサイド Chirnsideの外れに、Whiteadder waterと言う小川があり、そのすぐ近くに、ナインウェルズ Ninewells という小村があって、デイヴィッド・ヒュームの故地とされている。モスナーの『ヒューム伝』を参照。E.C. Mossner, *The Life of David Hume*, Oxford, 1980. P.20. Whiteadderを「ホワイトアダー」とするのなら、Blackadderは、「ブラックアダー」と称するのがベターではないだろうか。

原著65ページへの注記でダンピアの『世界周航記』を挙げた。現在、朝日新聞夕刊金曜日に連載中の『ガリバー旅行記』の、連載第23回(2020年11月20日)には、「おのれの書く内容と文体を気負って自己弁護した一節について、ダンピアの『周航記』1697年の記述をもじり、つぎ合わされてできている」と指摘され、ダンピアの同時代周辺への影響力を彷彿とさせる。朝日の連載では、『ガリバー旅行記』冒頭の2通の書翰が省略されているが、ガリバー船長から従兄のシンプスンへの手紙の冒頭では、ダンピアの『世界周航記』の出版に際して著者が、従兄のダンピアに助言したと述べている。山田蘭訳『ガリバー旅行記』角川文庫版、2011年。

原著91ページには、プレブルには珍しい注がある。そこでウィリアム・バトラーによる『農民の弁明』1878年刊、への注記があるが、この著者について、訳者は詳にしない。岩波書店の『世界人名大辞典』では、以下のような記述となっているが、この人物のことか否か、判断が付かない。識者のご教示を得たい。「ウィリアム・バトラー・イェイツは、1865-1939、アイルランドの詩人、劇作家。アイルランド最大の詩人、ノーベル賞受賞者(1923)。画家修行の後文学に転じ、アイルランド独立運動、アイルランド文芸協会の創設に尽力、ダブリンのアービー一座に拠ってアイルランド演劇の開花を実現した。」

追加される参考文献は以下の一点である。

参考文献追加

木村雅俊・中尾正史編『スコットランド文化事典』原書房、2006年。